

2022 年度

群馬大学共同教育学部 学部・附属学校連携室

教員養成 FD 活動推進委員会

報告書

2023 年 3 月

## 目次

I. FD 活動推進委員会の活動.....	2
1. 今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的な FD 活動の推進.....	2
2. 学部・附属学校園連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会の構成.....	4
3. 2022 年度事業計画.....	4
(1) 学部教員への案内.....	4
(2) 対象事業.....	5
(3) FD 参加登録および FD 発表登録.....	5
(4) FD 参加報告様式(1～3).....	7
II. 事業報告.....	10
1. 附属学校園・公開研究会.....	10
2. 教育実習 A, C, D および幼稚園教育実習.....	14
3. 附属小学校・提案授業及び授業研究会.....	21
4. 附属学校園における大学教員の公開授業.....	24
5. 新任教員 FD 研修会.....	27
III. 活動報告.....	31
1. FD 活動推進委員会の会議報告.....	31
2. 新任教員の活動報告：町田大輔.....	32
3. 新任教員の活動報告：阿尾有朋.....	34
4. 新任教員の活動報告：粟谷好子.....	37
5. 新任教員の活動報告：伊東 陽.....	39
6. 新任教員の活動報告：小山啓太.....	42
7. 新任教員の活動報告：関口 満.....	45
8. 新任教員の活動報告：カステヤーノ ワキーン.....	47
9. 新任教員の活動報告：津久井貴之.....	49
10. 新任教員の活動報告：阿部充寿.....	52
IV. 編集後記.....	55
「FD を通して大学教員と附属学校園が連携することの意義」	

## I. FD活動推進委員会の活動

### 1. 今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的なFD活動の推進

委員長 安藤 哲也

2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の中では、「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の中に共有されていない、教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い、学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない」等の問題が指摘された。また、国立大学法人の第1期中期目標期間終了を踏まえ、2009年6月5日に文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では、「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されている。このような背景のもと、本学教育学部では、当時の推進委員会が、教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適したFDプログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し、2011年4月から「教員養成FDセンター（以下、「FDセンター」）」がスタートした。

2017年8月の国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」の報告書では、「大学教員についての対応策」の中で早急に対応すべきこととして、「国立教員養成大学・学部において、研究者教員が一定期間、学校現場での教育実践研究の経験を積むことや、学校現場との共同研究を実施すること等について、時期や比率等に関する目標値を設定し達成状況をチェックすること等、教員養成分野の大学教員として必要な資質・能力を向上できる仕組みを整備することにより実際の学校現場における教育活動と教育学を融合できる大学教員を確実に増やすこと」が示されている。また、群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」でも、FDセンターに関する計画として「教員養成FDセンターを活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて検討する」（2016年度）が明記され、2021年度に至るまで「教員養成FDセンター（2020年度より教員養成FD活動推進委員会と改称）を活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて実施する」ことが示された。

このような提言や計画等からは、教員養成分野の大学教員として学校現場における教育活動と教育学を融合できる資質・能力及び実践力の向上に資する大学と附属学校園の連携による積極的な研修の実施が求められていることが窺える。一方で、このような研修に該当する機会は、学部・附属学校園が連携する活動の中に、既に少なからず存在している。たとえば、附属学校園の公開研究会や教育実習、学部教員による附属学校の児童生徒への授業や教員への校内研修等である。そこで、それらにFDの視点で大学教員が参加し、教育内容・方法や教育実践に資する自らの学びや気づき等を記録・報告する仕組みをつくることで実践的なFDの機会と位置付けるべく、2017年度よりFDセンターとしての事業を実施してき

た。その際、学部教員に対しては、次のような案内を行っている。

学部・附属学校連携室教員養成 FD センター（以下、FD センター）は、「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し、教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し、教育・研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。

現在、附属学校園と連携した活動を行っておられる先生は多いと思います。そのような附属学校園と連携した活動には、実質的に FD 活動に該当するものが少なからずみられます。そこで FD センターでは、附属学校園と連携した活動で FD 活動に該当するものについて、FD に位置づけ、それを推進することを本年度の重点取組としました。たとえば、附属学校園における公開研究会について、FD の視点による教員研修の位置づけ（事業計画化、事前案内等）と枠組み（規定様式の報告書提出による FD 参加登録、報告書の管理等）を設けることで、FD 参加の機会となり得ます。

これによって、昨年度から実施された「教員評価」においても、学部・附属学校園の連携活動が「FD への取組」に該当することが明確化されることとなります。

本年度の重点取組の推進によって、FD センターの目的の達成をはじめ、学部と附属学校園の連携活動が一層活発になっていくように、ご理解とご協力の程、宜しく願いいたします。

なお、具体的には、添付しました「学部・附属学校園連携による FD 活動（案内）」「FD センター事業計画（概要）2017 年度」「FD 参加報告書（様式 1～3）」をご覧頂ければと思います。

2020 年度より、教育学部が共同教育学部に改組されたことに伴い、学校教育臨床総合センターも教育実践センターに改められた。同様に、「教員養成 FD センター」は「教員養成 FD 活動推進委員会」へと改称された。新たな教育実践センターでは、よりよい組織を目指し、業務内容の見直しやスタッフの拡充などを行ったが、教員養成 FD 活動推進委員会の目的や業務内容に大きな変更はない。これまでの取組を基盤とした活動の継続性を大切にしたい。

本年度、学部教員提出の FD 参加報告書数をみると、公開研究会に関する報告書数は 25 件、教育実習に関する報告書数は 10 件、授業公開・研修会に関する報告書数は 4 件、新任教員 FD 研修会に関する報告書は 17 件、合計 56 件であり、未だコロナ禍の収束が見通せない状況にありながら、一定の成果を得ることができた。今後は、これまでの取組の一層の推進と充実を図り、学部教員に実践的な FD の機会をよりよく提供するとともに、学部教員が附属学校園を日常的に訪問することや附属学校園で授業をすることが当たり前の光景になることに貢献できるよう、努めていきたいと考えている。

## 2. 学部・附属学校連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会の構成

委員長	共同教育学部教授（教育実践センター）	安藤 哲也
副委員長	共同教育学部附属中学校副校長	関 悟
推進委員	共同教育学部附属中学校教頭	木村謙太郎
	共同教育学部教授（教育実践センター）	吉田 浩之
	共同教育学部講師（数学教育講座）	小泉 健輔
	共同教育学部講師（技術教育講座）	小熊 良一
	共同教育学部講師（家政教育講座）	佐藤 佐織
	共同教育学部講師（保健体育講座）	島 孟留
	共同教育学部講師（教育実践センター）	紺谷 正樹

## 3. 2022 年度事業計画

### (1) 学部教員への案内

共同教育学部 教員各位

学部・附属学校連携推進室  
教員養成 FD 活動推進委員会

学部・附属学校園連携による FD 活動（発表、参加）に関する事業計画

学部・附属学校連携室教員養成 FD 活動推進委員会（以下、本 FD 推進委員会）は、「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し、教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し、教育・研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。

現在、多くの先生方が附属学校園と連携した活動に取り組まれていると思います。そのような附属学校園と連携した活動には、実質的に FD 活動に該当するものが少なくありません。そこで本 FD 推進委員会では、附属学校園と連携した活動で FD 活動に該当するものを FD として位置づけ、推進しております。たとえば、附属学校園における公開研究会は、FD の視点から言えば、教員研修の位置づけと枠組みを設けることで、FD 参加の機会となります。これによって、「教員評価」においても、学部・附属学校園の連携活動が「FD への取組」に該当することが明確になります。

こうした取組を推進することによって、本 FD 推進委員会の目的の達成をはじめ、学部と附属学校園の連携活動が一層活発になっていくように、ご理解とご協力の程、よろしくお願い致します。

なお、具体的には、添付しました「学部・附属学校連携推進室 教員養成 FD 活動推進委員会 2022 年度 事業計画（概要）」をご覧頂ければと思います。

## (2) 対象事業

### ① 附属学校園・公開研究会 (FD 参加)

期日：幼稚園 11/3(木), 小学校 6/17(金), 中学校 10/13(木)・14(金), 特別支援学校  
11/11(金)

### ② 教育実習 A, C, D および附属幼稚園教育実習 (FD 参加)

期間：教育実習 A, C, D および附属幼稚園教育実習の全期間

### ③ 附属小学校・提案授業及び授業研究会 (FD 参加)

期間：11 月～2 月

### ④ 附属学校園における大学教員の授業 (授業者は FD 発表, 参加者は FD 参加)

期日：附属学校園の計画による

### ⑤ 附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会 (講師は FD 発表, 参加者は FD 参加) 期日：附属学校園の計画による

### ⑥ 新任教員 FD 研修会 (講師は FD 発表, 参加者は FD 参加)

期日：FD 活動推進委員会の計画による

## (3) FD 参加登録および FD 発表登録

FD として参加したことの登録 (以下、「FD 参加登録」) を希望する場合は、所定の FD 参加報告用の様式(対象事業ごとに 3 種類)に記述し、教育実践センター事務補佐員まで、メール添付 (あるいは様式に記述し紙媒体) で、参加した期日から 2 週間以内に提出し、それによって、FD 参加登録となります。また、「教員評価」の「FD 参加」の資料として事務局 (教育実践センター) で保管いたします。

また、附属学校園での授業者や研修会講師を務める等により「FD 発表登録」を希望する場合には、必ず事前 (遅くとも 1 週間前まで) に、期日や内容等をメールで教育実践センター事務補佐員あてに連絡して下さい。こちらから学部教員に周知します。

### ① 附属学校園・公開研究会の場合

附属学校園における公開研究会に参加し、FD 参加登録を希望する場合は、所定の FD 参加報告用の様式 1 に記述し、教育実践センター事務補佐員まで、メール添付 (あるいは様式に記述し紙媒体) で、参加した期日から 2 週間以内に提出し、それによって、FD 参加登録となります。なお、2 日間連続で開催される 1 つの公開研究会に、2 日間参加した場合については、1 つの公開研究会で FD 参加登録のカウントは 1 回となります。たとえば、附属小学校公開研究会 (2 日間開催) に、1 日の参加で 1 回のカウント、2 日間ともに参加した場合でも 1 回のカウントとなります。

### ② 教育実習の場合(教育実習 A のみ特別協力校を含む)

附属学校園における教育実習期間に、学生の授業等を参観し、FD 参加登録を希望する場

合は、所定の FD 参加報告用の様式 2 に記述し、教育実践センター事務補佐員まで、メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で、参加した期日から 2 週間以内に提出し、それによって、FD 参加登録となります。なお、1 つの教育実習の期間中で複数回の参観日があった場合については、1 つの教育実習で FD 参加登録のカウントは 1 回となります。たとえば、教育実習 A で 1 回、教育実習 C で 1 回となります。

### ③ 附属小学校・提案授業及び授業研究会の場合

附属小学校・提案授業及び授業研究会に参加し、FD 参加登録を希望する場合は、所定の FD 参加報告用の様式 1 に記述し、教育実践センター事務補佐員まで、メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で、参加した期日から 2 週間以内に提出し、それによって、FD 参加登録となります。なお、1 つの提案授業及び授業研究会に参加ごとに FD 参加登録のカウントは 1 回となります。

### ④ 附属学校園における大学教員による公開授業の場合

授業者の大学教員は、FD 発表となります（当該授業を学部教員に事前に案内する）。また、授業を参観し、FD 参加登録を希望する場合は、所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し、教育実践センター事務補佐員まで、メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で、参加した期日から 2 週間以内に提出し、それによって、FD 参加登録となります。なお、同じ授業者による同じ内容の授業が複数回実施され、その授業を複数回参観した場合には、FD 参加登録のカウントは 1 回となります。

### ⑤ 附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会の場合

各附属学校園単位以上で、教員研修会として位置づけ開催した研修会の担当講師の大学教員は、FD 発表となります（当該教員研修会を学部教員に事前に案内する）。また、研修会に参加し、FD 参加登録を希望する場合は、所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し、教育実践センター事務補佐員まで、メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で、参加した期日から 2 週間以内に提出し、それによって、FD 参加登録となります。

### ⑥ 新任教員 FD 研修会の場合

研修会では、学部・附属学校園の連携活動に関連する内容を取り上げ、また附属学校園の教員がメンバーとして参加し意見交換等を行うため、FD として有意義な機会となります。主として新任教員を対象としていますが、それ以外の学部教員へも参加を案内いたします。研修会で講師の大学教員は、FD 発表となります（当該研修会を学部教員に事前に案内する）。また、研修会に参加し、FD 参加登録を希望する場合は、所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し、教育実践センター事務補佐員まで、メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で、参加した期日から 2 週間以内に提出し、それによって、FD 参加登録となります。

#### (4) FD 参加報告様式(1~3)

様式1 FD 参加報告用 (公開研究会)

学部・附属学校連携推進室 教員養成FD活動推進委員会 宛

提出先:

教育実践センター

事務補佐員 品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日: 令和\_\_\_\_年\_\_\_\_月\_\_\_\_日

大学教員名 \_\_\_\_\_

参加事業: 附幼・附小・附中・附特 (○で囲む)

参加期日: \_\_\_\_月\_\_\_\_日

参観授業名 (1つ), あるいは 講演タイトル名

---

※ 授業を記述の場合 : ○年○組, 教科, タイトルなど。保育参観の場合は学級名。

※ 講演会を記述の場合: 講演のタイトル名。

---

---

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や, 参加してよかった点など ※字数任意

---

---



様式2 FD参加報告用（教育実習）

学部・附属学校連携推進室 教員養成FD活動推進委員会 宛

提出先：

教育実践センター

事務補佐員 品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：令和\_\_\_\_年\_\_\_\_月\_\_\_\_日

大学教員名\_\_\_\_\_

参加事業：附幼・附小・荒牧小・桃川小・附中・伊三中・附特（○で囲む）

参加期日：\_\_\_\_月\_\_\_\_日

参観授業名（1つ）

---

※ ○年○組，教科名，タイトルなど。保育参観の場合は学級名を記入ください。

---

---

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

---

---

様式3 FD参加報告用（公開授業・教員研修会）

学部・附属学校連携推進室 教員養成FD活動推進委員会 宛

提出先：

教育実践センター

事務補佐員 品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：令和\_\_\_\_年\_\_\_\_月\_\_\_\_日

大学教員名\_\_\_\_\_

参加事業：附幼・附小・附中・附特 （○で囲む）

参加期日：\_\_\_\_月\_\_\_\_日

参観授業（1つ）、あるいは 研修会名

---

※ 授業の場合：○年○組，教科名，タイトルなど。

※ 研修会の場合：タイトルなど。

---

---

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

---

---

## Ⅱ. 事業報告

### 1. 附属学校園・公開研究会

推進委員 佐藤 佐織

#### (1) 事業概要

開催日	学校種	事業	内容
R4. 6. 10-20	附属小学校	授業公開 研究会	6/10～20 授業動画（19 授業）配信 6/17 オンライン授業研究会
R4. 10. 13-14	附属中学校	授業公開 研究会 講演 実践発表	10/13 公開授業・研究会・文部科学省講演 数学，理科，技術，道徳 10/14 公開授業・研究会・ICT 実践発表 国語，社会，英語，音楽，美術，保健体育
R4. 11. 3	附属幼稚園	研究会	公開保育・保育を語る会
R4. 11. 11	附属特別 支援学校	授業公開 研究会	対面とオンライン（ライブ配信）の同時開催

#### (2) 報告

参加報告数は全 24 件であり，公開研の校種別内訳は，附属幼稚園 1 件，附属小学校 12 件，附属中学校 9 件，附属特別支援学校 2 件であった。

業務多忙のところ，FD 活動の一環として報告書を提出して下さった先生方に感謝申し上げます。以下，校種別に FD の参考となる記述等をまとめる。

#### ○附属幼稚園

研究主題「夢中になって遊ぶ幼児を育む保育ー遊びの魅力を膨らませる環境の再構成ー」のもと，11 月 3 日（木）に公開研究会講演会を 3 年ぶりに対面で開催した。学年ごとに参加者数に制限を設けての実施となったが，研究主題について，実態観察と協議の時間を設けて，意見交換を行った。

幼児教育に係る授業を受講している学生 30 名以上が来園し，保育を観察した。

#### ○附属小学校

研究主題「社会に変革を起こす子どもの育成～『非認知的能力』を高める学びのデザインを通して～」のもと，6 月 10 日（金）～20 日（月）の期間中 YouTube で 19 の授業を視聴可能とし，6 月 17 日（金）に授業研究会を Zoom で行った。

参加報告のあった授業は，国語，社会，算数，図画工作，道徳，英語で，報告書には以下のような記述があった。

・児童が ICT を文房具のように使用して，調べたり，まとめたり，自分の考えを記入したり，グループの意見をまとめたりしている姿を見て，実習生となる学部生に子供に使用させ

ることができるようにしなければならないと感じた。

・タブレットを使用した授業も、全体的に慣れてきているようで、全体の意見を共有したり、友達の意見を引き継いで思考を巡らせたりといった、タブレットならではの授業の運びも見られた。アナログとデジタルとハイブリッドと言われるが、そのバランスをうまくとることでさらに学習効果が高まるだろうと感じた。

## ○附属中学校

研究テーマ「生徒一人一人の学びを最大限に引き出す授業の創造－ICTを活用した『個別最適な学び』と『協働的な学び』の充実に向けた実践を通して－」のもと、10月13日、14日に10の授業と授業研究会を対面で行った。また、文部科学省特別講演とICT実践発表・ワークショップも同日に開催された。

参加報告のあった授業は、国語、社会、数学、理科、道徳で、報告書には以下のような記述があった。

・中学校の文学の授業の読み深めに対して、ICT活用の方策と課題点について、研究会での討議も含め知見を広めた。物語の動作化に、タブレットの動画撮影機能とロイロノートの共有機能を用いて、登場人物の心情について読解を深めていた点、参考になった。

・ICTを使うスキルだけではなく、メリットやデメリットも整理しておき、講義等でも使えるようにしていきたい。

・問題解決の過程において、それぞれの教科の特質に応じながらねらいを達成するための手立てとして、「ICTをどのように活用するか」がよく練られており、生徒が「個別最適な学び」や「協働的な学び」の際に、思考を深めている様子がうかがえた。特に、理科の授業で扱っていた「マイ探求シート」については、それぞれの一単位時間の課題以外に、単元を通して生徒一人一人が「探求したい」と感じたことをマイテーマとして取り組んでいるため、その活用次第では今後「学習の個性化」にもつながっていくと思われる。

## ○附属特別支援学校

研究テーマ「子どもが自ら考え、学び合う授業実践～資質・能力の育成に向けた『個別最適な学び』と『協働的な学び』へのアプローチ～」のもと、11月11日（金）に一般授業3、提案授業3、授業研究会とシンポジウムを、対面とオンライン（ライブ配信）による同時開催で行った。

参加報告のあった授業は、中学部の提案授業「数学科（測定）くらべよう はかろう～ふとく宅配ゲーム」で、報告書には以下のような記述があった。

・今回の授業は「重さ」に着目した授業である。重さは目に見えないが、「重い」を数学的に、道具を用いながら捉えていくことを目指した授業構成であった。個のレベルにあった道具が準備され、個の探究が大事にされていた。一方で、孤立した学習にならないように、問題設定において工夫がなされており、協働的な学習の場面が意識されていた授業であった。

個別最適な学びと協働的な学びの一体化は、校種に依らず、学習指導要領で求められていることである。共有できる問題の設定、そしてその問題の下での個に応じた課題を行うことが、これら一体化を伴う授業設計の一つのスタイルとして明示されたものであったと捉えることができる。

### (3) 成果・次年度に向けて

中央教育審議会では、令和3年1月26日の第127回総会において『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」を取りまとめた。答申では、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に1人1台端末の整備と活用が欠かせないとし、「令和の日本型学校教育」の実現にICTの整備と活用が基盤にあることを説き、これまで築いてきた学校教育とICTの活用に関わる基本的な考え方を以下のように示している。

・大学における教員養成段階において、学生が1人1台端末を持っていることを前提とした教育を実現しつつ、児童生徒にプログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力も含む情報活用能力を身に付けさせるためのICT活用指導力を養成することや、学習履歴（スタディ・ログ）の利活用などの教師のデータリテラシーの向上に向けた教育などの充実を図っていくことが求められる。このため、教員養成大学・学部や教職大学院は、学校教育におけるICTを効果的に活用した指導のノウハウをいち早く収集・分析しつつ、新たな時代に対応した教員養成モデルを構築するなど、Society5.0時代の教師の養成を先導する役割を果たすことが期待される。

・新学習指導要領において示された資質・能力の3つの柱を一体的に育成し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に資する、我が国ならではのICTの活用モデルを確立していくために、教師は、授業研究の積み重ねにより、「子供はいかに学ぶか」「どう支援するか」を問い直していくとともに、教員養成大学・学部や教職大学院、国立大学附属学校は、このような不断の授業改善に取り組む教師のネットワークの中核としての役割を果たしていくことが求められる。

今年度の報告書をまとめたところ、「ICTを活用した授業が出来る教員養成の在り方」、「ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体化による思考を深める授業づくり」等、上記答申で挙げられた学校教育とICTの活用に関わる基本的な考え方に拠るものが多く見受けられた。

これは、本学の附属学校園が『令和の日本型学校教育』の構築を目指して取り組んできたICT活用の実践が、FDの観点からも実感を持って報告されたものと考えられる。大学と附属学校園との連携は大変意義深いものであり、教育現場で求められる教員の資質・能力や授業実践を大学の教員養成の場面に還元することができる。また、教科や専門の枠を越えた取り組み

に発展することが期待される。大学と附属学校園との連携、他教科との連携の振興を進めていくことが本委員会の重要な役割であると考えます。

## 2. 教育実習 A, C, D および幼稚園教育実習

推進委員 紺谷 正樹

### (1) 事業概要

教員養成を目的とする大学・学部において、周知の通り、教育実習はその「要」に位置付けられる。教員志望学生は、教育実習を通して教育の現実世界に触れる機会を得ると同時に、学生一人一人にとって、それまで自分が積み重ねてきた教職への努力を問いただす試練の機会と捉える必要がある。本学部の教育実習は、1年次から4年次にかけて、学校現場での体験と学部での専門教科の学習を段階的・往還的に設定してある。その概要は、教育現場体験学習⇒授業実践基礎学習⇒教育実習事前事後学習及び教育実習A・B・C・D・幼稚園実習・高校実習⇒教育実践インターンシップである。

本事業の目的は、附属学校園と連携した活動、とりわけ教育実習における参観をFD活動推進委員会の活動として位置づけることにより、本学教員の主体的な気付きを促すことにある。

### ① 教育実習 A

対象：学部3年生

学校名	事前指導	本実習
附属小学校	8月24日	8月31日～10月3日
荒牧小学校	8月24日	8月30日～9月30日
桃川小学校	8月23・24日	9月1日～9月30日
附属中学校	8月23・24日	8月26日～9月26日
伊勢崎市立第三中学校	8月17・18・19日	9月1日～9月30日

#### ●附属小中学校の教諭が講師となる事前事後学習

6月1日 学習指導案作成指導 (14:00～17:20)

・会場：C201 および C204 教室 (対面開催)

諸連絡 14:00～14:10

附属中学校 14:10～15:40

附属小学校 15:50～17:20

7月13日 実習校別オリエンテーション

・全体オリエンテーション 12:40～15:20

・講義「教師という仕事をまるごと学ぶ教育実習」 12:40～14:10

・講話「教育実習委員長及び3年生部会長講話」 14:20～15:20

・実習校別オリエンテーション 15:30 ～ 17:00

12月14日 教育実習事後学習

・講話「附属小学校」 13:30 - 15:00  
 ・講話「附属中学校」 15:10 - 16:40  
 ・全体指導「教育実習委員長，3年部会長」 16:50 - 17:30

## ② 教育実習 C (特別支援学校)

対象：特別支援教育専攻3年生

内容	日程
事前学習	10月5日
事前観察	11月14日
事前指導	11月15日
本実習	11月17日～12月2日

※事前指導ならびに事前観察は附属特別支援学校で実施

## ③ 教育実習 D (特別支援学校)

対象：障害児教育専攻4年生，他専攻で特別支援教育を履修している4年生，専攻科生，

学校名	実習校事前指導	本実習
高崎特別支援学校	5月24日 6月30日 7月1日 8月29日 8月30日 8月31日	9月1日～9月22日
二葉特別支援学校	5月25日 6月24日 ※7月4日～7月15日 ※この期間中に3日間 9月1日～9月7日	9月6日～9月28日
渋川特別支援学校	5月12日 5月17日 5月27日 7月5日 8月31日 9月1日	9月5日～9月27日
渡良瀬特別支援学校	6月6・7・23・24日	9月1日～9月22日
群馬県立聾学校	7月7・15日 9月1日	9月8日～9月20日
前橋特別支援学校	6月28日 7月11日 8月31日	9月1日～22日
附属特別支援学校	(観察)5月17日 6月21日 (指導)6月22日 7月15・19日	8月31日～9月21日



#### ④ 幼稚園実習

対象：3年生希望者

観察実習：12月7・8日

事前指導：12月9日

本実習：1月12日～2月1日

事後指導：2月8日

#### (2) FD 報告

表1は本委員会に提出された小学校の授業参観に関するものであり、表2は中学校の授業参観に関する報告内容である（下線部は、筆者加筆）。

表1 FD活動推進委員会に提出された報告内容（小学校）

学校	日付	内容	報告内容
附属小	9/20	【第2学年】 算数 「さんかくやしかくの形をしらべよう」	本時は、三角形と四角形の形について調べる小学校2年生の算数授業であった。特に、個々の児童が操作活動を通して三角形の形について捉えられるように、児童全員に色紙で作った三角形をいくつか用意した教具の準備と工夫を指導者は行っていた。そのため、授業の始まりから児童の興味関心を高めることができおり、その後の操作活動に児童が意欲的に取り組んでいた。学習過程の中核で活用する教具の工夫と準備は、児童の学びにとってたいへん有効であることを改めて確認することができた。しかし、「色の付いた三角形をあげるよ」という指導者の一言が「色の付いた三角形をもらえる。もらえたらそれで自由に遊べる」という児童の思いを誘ってしまい、途中から指導者のコントロールがしにくくなってしまった。授業全体としては指導案に沿った流れで活動が進んでいたが、児童の発言・つぶやきから把握できる思考の深まりが感じられなくなってしまった。授業の構想や準備を生かすためには、指導者のちょっとした発言にも気をつけないといけない。小学校の2年生という低学年児童の発達段階ではなおさらである。学生に最も欠けているのが、児童生徒の発達段階に関する理解である。 <u>学習内容や学習方法などの授業改善は大切であるが、その土台となる児童生徒の理解が不可欠なことも私が担当する大学の授業で今後学生に伝えていきたいと思う。</u>

附属小	9/27	【第1学年】 算数 「うごかせないもののながさのはかりかた」	学部3年生の教育実習生の授業を参観した。ペットボトルのふたを飛ばした距離について、紙テープを使うことで、長さを写し取って比べることを学習する内容であった。 1年生ということもあり、教室を落ち着かせることに苦労している場面も見受けられたが、具体物を使ったゲーム形式から児童の興味をひき、学習内容につなげていく構成は良かったと思う。一方で、「長さを写し取る」という本時の <u>本質的な部分</u> にもう少しせまれる時間的余裕があると、さらに深まったように思う。
附属小	9/27	【第1学年】 算数 「ながさくらべとひろさくらべ」	低学年でゲーム的活動を取り入れた授業ということで、不測の事態や混乱が生じがちな、チャレンジングな授業であったが、実習生は時間管理、個別指導など検討していたと考える。 事前の教材用動画の作成、授業中の仕様など、ICT活用については、タブレットの使用が開始された数年前に比べて、 <u>かなりこなれてきたとの印象</u> を受けた。
荒牧小	9/26	【第3学年】 外国語活動	附属学校ではない学校の授業を参観することで、両者を比較できた。 ・9月上旬に観察実習の視察で附属小・中学校を訪れ、附属学校での先進的な授業を参観することができた。また、現職と教育実習の授業を比較することもでき、実習生はそのような授業を参観の上、自身の授業実践に臨むことができるため、「大学—現場」の往還だけでなく、 <u>「理論—実践」の往還の下、「参観—授業実践」の往還を実現することができ</u> 、とても良い環境での教育実習になっていると感じた。 ・公立校と附属学校を比較することで、 <u>附属学校の先進的な取り組みをどのように他の学校に波及させることができるのか</u> 、その利点と課題を把握することができた。

荒牧小	9/26	【第6学年】 家庭科 手提げ袋の作成	<p>家政教育講座の学生の教育実習での授業を参観した。家庭科の授業で、内容は手提げ袋の作成であった。前回の続きからで、参観回では手提げ袋に持ち手をミシンで縫い付けることを目標としていた。</p> <p>実習学生は、最初に全体に対して本時のめあてを示し、児童はそれを理解している様子であった。しかし、実際の手順の説明に関してはやや言葉足らずで、伝わっていない部分があるような印象を受けた。実際に作業が始まると、一部戸惑っている児童がいる様子が見受けられた。実習学生は、作業の途中にミシンの実演の時間なども設け、そこで理解した児童もいたことが見受けられた。しかし、後ろのほうで見えなかったり、そもそもミシン作業の前段階でつまずいていたりする児童もいた。</p> <p>最終的に、全員が最低限のめあてを達成できている様子であった。しかし、事前の十分な説明や、<u>個別のフォロー</u>ができるとより良いと感じた。</p>
-----	------	--------------------------	--

表2 FD活動推進委員会に提出された報告内容（中学校）

附属中	9/15	【第1学年】 音楽 詩の内容と 曲想との関 わりを感じ 取ろう	<p>大学内の日頃の活動からだけではわからない、学生の姿を見ることが出来て良かった。</p> <p>中学生が授業に真剣に取り組む様子、<u>タブレットを有効に活用している様子</u>など、現在の現状を知ることが出来、それを日頃の大学の授業や今後の研究に生かしていきたいと思った。</p>
附属中	9/16	数学 【第1学年】 一次方程式、 【第2学年】 1次関数 【第3学年】 相似と比	<p>今後の自分自身の「指導法」の授業を改善するための視点を 得る目的で、実習生による3つの研究授業を全て参観した。</p> <p>3名の実習生の授業には、それぞれに特色があり、それぞれによかった点と課題があった。全体にみられた課題を受けて、今後の「指導法」の授業において、<u>どのような点をさらに強調すべきか、活動として取り入れるべきかという視点がいくつも得られた。</u></p>

附属 中	9/16	2年4組「1 次関数の利 用」	この授業では、「長方形の2頂点と長方形の周上を動く点を結んで出来る三角形の面積を一次関数を用いて考察する」という内容を扱っていた。授業者である実習生は、当該の単元の重要な基礎である特に「表」「式」「グラフ」の関係に重点を置いて授業を展開していた。今回の研究授業では研究会は開かれなかったため、私は授業終了後に授業者の実習生に対して、研究授業の良かった点・反省点についてコメントした後、数学的な内容に関する補足として「 <u>表と式の論理的な関係についての補足</u> 」、「 <u>グラフを用いることの利点について、強調すべき箇所の再確認</u> 」等を行った。
伊三 中	9/26	1年4組 社会科地理 的分野 南 インド	ICTを十分に活用し、生徒のインドに対するイメージを、授業を通して変容させる授業となっていた。 教科書の内容を全て扱うのではなくてインドの経済発展の中でもICT産業に絞り、なぜインドは急激に経済発展したのか、という問いを追究させる授業になっていた。 独自に資料を準備してモニターで生徒全員で共有し、 <u>ICTを活用して個人の活動からグループワークへと進み</u> 、「ひろば」に意見を提出させ、共通点・相違点をピックアップしていた。生徒への声かけ、机間巡視も充分になされていた。 <u>授業規律が素晴らしく</u> 、生徒は全体を通して集中して授業を受けていた。 先生方のご指導により、学生の大きな成長を実感できる授業であった。

### (3) 成果と課題

前述したように本事業の目的は本学教員の主体的な気づきを促すことにある。今年度のFD報告書における「主体的な気づき」を抽出し（下線部）、それについての考察を成果とする。

#### 【成果】個別最適な学びの充実（指導の個別化・学習個性化）

(ア) 指導方法の変化の具体として、GIGA スクール構想の具現化があげられる。衆知のとおり、児童生徒の学習環境は、一変した。それに伴い、ICT機器を用いた教育方法が確立している。

(イ) 児童生徒間のコミュニケーションの変化が顕著になった。従来の教師による一斉指導の場面から、児童生徒間が話し合いという音声言語によるグループ活動から、タブレット端末を活用した協働学習の場面設定の機会が増えている。

**【課題】 教科横断的な視点に立った交流**

(ア) 教科固有の学びをより豊かなものにするためには、その専門性を高めることを基本としつつ、他教科との関係性を意識することが肝要となる。その点では、教科間の交流は必要条件となる。

(イ) 特別支援学校並びに幼稚園実習の交流が希薄となっている。共生社会の形成に向けて障害者の権利に関する条約第 24 条によれば、「インクルーシブ教育システム」とは、『(中略)、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が「general education system」から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされている。』となっている。この趣旨を学ぶ機会として、積極的な授業参観を期待する。

### 3. 附属小学校・提案授業及び授業研究会

推進委員 島 孟留

#### (1) 事業概要

附属小学校では、令和4年度より新たな研究主題として、「共によりよい生活を創造する子どもの育成（1年次）」を設定し、「『目標への情熱』と『粘り強さ』に着目した真正な学びのデザイン」を達成するべく、研究をスタートさせたところである。

各教科で実践された授業（いずれ直接参観とZoomでのハイブリッド）については、以下の通りである。

##### 【国語科】

「音読げきをしよう 『お手紙』」（第2学年）

日時：令和4年11月8日（火） 10:30~11:15

授業者：前原 聡

##### 【図画工作科】

「ぐんまの海」（第4学年），

日時：令和4年11月15日（火） 13:35~14:20

授業者：大塚 祐貴

##### 【英語科】

「This is for you ～がんばっているきみにありがとう～」（第3学年）

日時：令和4年11月17日（木） 10:30~11:15

授業者：原 雄規

##### 【体育科】

「セストボール」（第4学年）

日時：令和4年11月21日（月） 10:30~11:15

授業者：石塚 祐子

##### 【道徳科】

「一人一人を大切に『のこぎり山の大ぶつ』」（第2学年）

日時：令和4年11月24日（木） 13:35~14:20

授業者：栞原 和馬

### 【音楽科】

「詩と音楽の関わりを味わおう（歌唱）」（第6学年）

日時：令和4年11月29日（火） 10:30~11:15

授業者：稲森 稚明

### 【理科】

「水溶液の性質」（第6学年）

日時：令和4年12月13日（火） 10:30~11:15

授業者：井上 俊介

### 【生活科】

「ふゆとなかよし～かぜとあそぼう～」（第1学年）

日時：令和5年1月31日（火） 10:30~11:15

授業者：狩野 葵

### 【社会科】

「特色のある地域の人々の暮らし」（第4学年）

日時：令和5年2月2日（木） 13:35~14:20

授業者：樋口 晃

### 【算数科】

「ずをつかってかんがえよう」（第1学年）

日時：令和5年2月7日（火） 10:30~11:15

授業者：中野 紗織

## (2) 報告

業務の合間を縫ってご参加・ご報告いただいた先生方のご意見をまとめたものを、以下にご紹介させていただきます。

### 【英語科】

- 友達が喜ぶ Thank you カードを作成するために、子ども達が英語を使って言語活動を行っている姿が多く見られた。
- 小学校3年生には難しいと思われる11以上の数字も自然に耳にすることができ、子ども達が前单元までに習った英語表現に対して、よく慣れ親しんでいる様子がうかがえた。
- 子ども達の思いを受け止めながら、本地のめあてを設定している点が、他の学校に参考になったと思われる。

- 授業の構成や ALT の活用，デモンストレーションなどでは，ところどころ課題と思われる点も見られたため，群馬県教育委員会義務教育課と連携を図りながら支援していきたいと感じた。

#### 【道徳科】

- 授業の課題文を皆で読む前に，子ども達個人の体験を振り返らせ，考えさせることで，子ども達はその後に読む課題分の内容を自らのこととして捉えていたと思った。このひと手間が大切なのだと，参考になった
- 子どもが皆，積極的に意見を出していたことが印象的であった。
- 今日は何を話しましょうか，と教員から子ども達に問いかけていたことが，心に残った。
- 子ども達の自主性を信じている様子が分かり，私自身も学生を誘導するだけでなく，自主性を信じるのが大切だと思わされた。
- ICT 教育の利点をいかした授業をされていると思った。

#### (3) 成果・次年度に向けて

本年度より新たに研究主題を設定し，推進された授業はいずれも，子ども達の情熱や粘り強さを引き出し，かつ子ども達が自ら進んで学ぶことを促すような内容であったように感じる。録画視聴など，ハイブリッド開催の利点を活かし，多くの方から多角的な意見を集めることで，本研究目的の達成につながる議論を深められることが望まれる。



#### 4. 附属学校園における大学教員の公開授業

推進委員 木村 謙太郎

##### 事業内容(各公開授業内容等の報告)

##### ① 附属特別支援学校 令和4年7月14日(木) 小学部3組(第5、6学年の計6名)

技術教育講座 講師 小熊良一

生活単元学習 ケーキを買ってお城を目指そう (小学校プログラミング)

授業概要：

本授業では、プログラミング学習用ロボット PETS を用いて、順次・反復のプログラムを作成した。第1時は、3つのカード(お城、ケーキ、爆弾)、ブロックの入れ方、ブロックの動きを確認し、PETSの仕組みを知った。また、動物や乗り物など自分の好きな絵を描いたカードをロボットに貼って自分のオリジナルロボットに仕立てた。

第2時(本時)は、児童一人ずつが前時に作成した自分のオリジナルロボットを用いて、自分の課題を解決していった。課題はレベル1からレベル6まで用意され、レベル1から順番に進めていった。児童一人に対して一人のファシリテーターが指導した。児童は、カードに示されたように爆弾やケーキ、お城を配置し、爆弾を避けながらケーキを獲得し、最終的にお城に到達するためのブロックの組み合わせを試行錯誤して考えた。レベル1でロボットを動かすことを体験した児童もいれば、反復までを理解しレベル4まで進んだ児童もいた。



##### ② 附属中学校 令和4年7月15日(金) 第3学年4クラス

国語教育講座 准教授 河内昭浩

国語 具体例をもとに説明文を書く

授業概要：

本時は、自分の体験を一般化し、改めて文章にする学習を行った。生徒は事前に、「中学校での思い出2つとその理由」という課題で作文を書き、Google Classroomを用いて提出した。本時の導入では、入試や社会で求められている国語の力につ



いて実際の入試問題を例に説明を行った。生徒は自分の体験や経験だけでなく、一般社会にどのような意味があるか「一般化」しながら作文を書くことが大切であると理解することができた。次に、シンキングツール「ベン図」を用いて、自分の2つの思い出の共通点と相違点をまとめる学習を行った。生徒は、共通点の自分や社会にとっての意味を整理し

た。最後に、2つの思い出に共通する事柄や特徴を整理した上で、「中学校時代の思い出」の文章を再文章化する活動を行った。

### ③ 附属中学校 令和5年1月18日(木) 第3学年2クラス

理科教育講座 准教授 佐藤綾

理科 「群馬県に生息する野生メダカの保全について考える」

授業概要：

本時は、市販の黒いメダカを野生のクロメダカが減っている地域に放流することは、絶滅危惧種であるメダカを守る行動といえるのかを探究した。本時の導入では、メダカが絶滅危惧種であることを理解させ、メダカを守るために野生のメダカと同じ品種、色の市販のメダカを放流させる活動について賛成か反対か考えさせた。実際に野生のメダカと市販のメダカを同じ水槽で育てた動画やメダカの体色と遺伝子の関係についての資料、トキなどの野生で絶滅してしまった生物についての資料を提示した。生徒はこれらの資料から、「絶滅から守るならどんどん放流した方がよい」や「野生の遺伝子の形を守るなら放流しない方がよい」と考え、メダカの保全に向けた様々な考えを理解した。最後に、いくつかの野生のメダカの遺伝子が既に汚染されていることが調査によって明らかになっており、この問題を国内外来種と呼ぶことを伝えた。生徒は絶滅から守るのか、遺伝子を守るのかなどを自分なりの答えを出し、自身のこれからの行動と関連付けて考察していた。



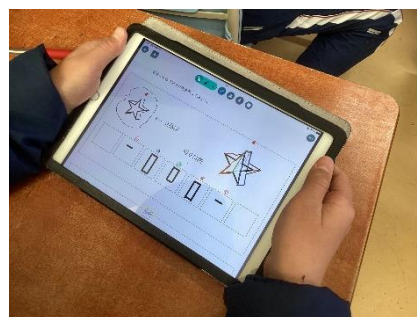
### ④ 附属中学校 令和5年2月10日(金) 第2学年4クラス

数学教育講座 准教授 山本亮介

数学 4次元を見る

授業概要：

本時は、「4次元を見る」というテーマのもと、私たちの生活である3次元の世界をさらに発展させたものについて考えた。本時の導入では、「4次元空間に住む人は、箱の中のりんごを、箱を開けずに取り出すことができる」ということを例に、4次元というものについての説明を行った。4次元について考えていく上で、まずは、3次元立体を平行ないくつかの平面で切ることができる切り口を並べた切り口図について考えた。その切り口図を用いて、生徒同士でクイズを出し合い、3次元立体についての理解を深めた。そして、3次元を4次元に発展させ、4次元立方体の切り口図を考えた。それらをふまえた上で、なぜ4次元空間に住む人は、箱の中のりん



ごを、箱を開けずに取り出すことができる理由について説明した。

授業後には生徒から、「4次元についてもっと詳しく知りたいと思った」という感想が多く挙げられた。また、 $n$ 次元の場合を考え、今回の授業を一般化して考えている生徒も見られた。

#### ⑤ 附属中学校 令和5年2月20日(木) 第3学年4クラス

数学教育講座 准教授 大下達也

数学 余りに着目しよう

授業概要：

本時は、整数を自然数で割ったときにできる余りの概念について学習した。2つの整数 $a, b$ の差が整数 $n$ の倍数となるとき、 $a$ は法 $n$ で $b$ と合同であるという定義のもと、具体的な数を用いての例を見ながら合同と余りについて考えた。



合同式の考えを用いることで、絶対値の大きな数を100で割ったときの余りを簡単に導き出すことができることを生徒は理解することができた。また、次の年の同じ日付が何曜日になるかを合同式を用いて考え、日常の中にも余りの考えを生かすことができるのだと生徒は実感していた。最後に、フェルマーの小定理についての説明を聞き、数の周期性と暗号の関係性について理解することができた。

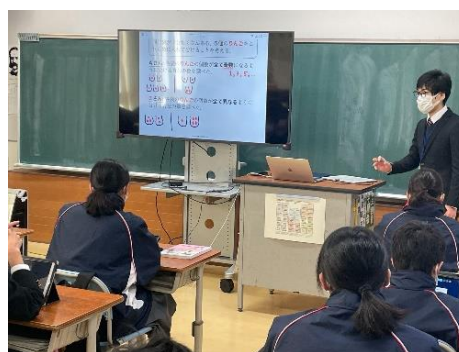
#### ⑥ 附属中学校 令和5年2月22日(水) 第1学年4クラス

数学教育講座 准教授 石井 基裕

数学 整数の分割におけるオイラーの定理

授業概要：

本時は、オイラーの定理である「 $n$ を自然数としたとき、奇数のみによる $n$ の分割の総数と異なる数による $n$ の分割の総数は等しい」ということを学習した。生徒は、初めに、具体的な事象に置き換えたり、具体的な数値で数え上げて確認したりしてオイラーの定理を検証した。その後、数え上げではない方法でできないかを考えた。



そして、どうすれば「奇数のみの分割」と「異なる数の分割」をつなげられるかを周りとは協力しながら考えた。「奇数のみの分割」は等しい数のペアを結合することで「異なる数の分割」が作れることと、「異なる数の分割」は偶数を2等分していくことで「奇数のみの分割」ができることに気が付いた。そうすることで数えることなく、1対1対応の考え方を使って2つの総数が等しいことを理解することができた。

## 5. 新任教員 FD 研修会

推進委員 小熊 良一

推進委員 小泉 健輔

### 事業概要と報告

#### ① 第1回

期日：令和4年5月31日（火）

時間：10時20分～11時50分

場所：共同教育学部6号館108教室

内容：

1. 2022年度FD活動推進委員の紹介，新任教員の紹介
2. 共同教育学部の歴史，組織，特色（藤森学部長）
3. 本年度の新任教員FD研修の概要（安藤）
4. 附属学校園の役割（関副校長）
5. 教員養成の仕組み（安藤）
6. 意見交換
7. その他

次回（第2回研修会）について

本年度新任教員FD研修会で研修を行う新任教員は9名である。第1回となる本研修会では，本研修会で行うFD研修の概要，本学共同教育学部の特色，附属学校園に関すること，教育実習の内容等について説明がなされた。藤森学部長からは，共同教育学部設置の背景や群馬大学・宇都宮大学両大学の特色を活かしたシナジー効果について詳しい説明がなされた。また，関副委員長からは，附属中学校の内容を中心に，附属学校園の役割，また学部教員の特別授業や共同研究などの学部と附属の連携の推進について詳しい説明があった。

新任教員からは「4月から約2か月経ったが，未だに学部や附属学校園について分からないことが多かったため，1時間半という研修時間があったという間に過ぎ，どの話も参考になった。」といった感想が寄せられた。初回の研修会として，有意義な場を提供できたものと思われる。



## ② 第2回

期日：令和4年7月26日（火）

時間：16時00分～17時30分

場所：共同教育学部6号館106教室

内容：

1. 附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説  
（附属中研究主任：関根先生）
2. FD対象事業に参加して（新任教員）
  - ・附属小学校公開研究会
  - ・大学教員による特別授業
3. 意見交換
4. その他  
次回（第3回研修会）について

今回は、附属中学校研究主任関根先生より、附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説を行っていただいた。新任教員からは「附属中学校での実践報告から、自ら問題を解決し未来をつくる生徒の育成、一人一台タブレット端末の活用など積極的に実施している現状と、課題を知る機会となりました。」や「解説及びその後の先生方からの意見から、授業者がICTをどう使うのかその目的が明確である必要性を感じた。授業者が目的を明確にしていないと、あえて機器を使用する意義や意味が薄れ、学習の効率化や向上化が図れないためである。」といった感想が寄せられ、附属学校園における取り組みや、最新の教育事情に関する理解を深める上で、有意義な研修の場を提供できたものと思われる。



### ③ 第3回

期日：令和4年12月5日（月）

時間：17時40分～19時10分

場所：共同教育学部6号館105教室

内容：

1. 学部教員による講話  
講師 佐野 史 教授（理科教育講座，教務委員長）  
「宇都宮大学との連携について ―現状と課題―」
2. 今年度の教育実習について（安藤）
3. FD 対象事業に参加して（新任教員）
  - ・教育実習（A, C, D, 幼稚園）
  - ・附属中学校公開研究会，附属特別支援学校研究会
  - ・附属小学校・提案授業及び授業研究会
  - ・附属学校園での大学教員による授業
4. 意見交換
5. その他

今回は、共同教育学部における宇都宮大学との連携について、教務委員長の佐野教授よりお話をいただいた。宇都宮大学との共同教育学部において、より幅広く深い教育内容の授業が可能となることや、教職特別演習などの共同教育学部独自の科目があることなどが確認された。また、斉一科目を担当する際の現状と課題についても、意見交換が行われた。新任教員からは、「本学と宇都宮大学における設置の経緯、現状における課題と今後の展望について要点をおさえて理解することができた。斉一科目の単位設定や授業の実施方法など課題は多いが、まずは宇都宮大学との共同歩調を取り、高めていくことが重要だと感じた。」といった感想が寄せられた。



#### ④ 第4回

期日：令和5年2月20日（月）

時間：12時40分～14時10分

場所：共同教育学部6号館105教室

内容：

1. 新任教員による報告（発表）（新任教員9名，うち2名は欠席）
2. 1年を振り返って
3. その他

今回は7名（2名欠席）の新任教員が，一年間の活動報告を行った。

町田大輔准教授からは，教育実習の巡回指導，現場の先生方との意見交換から学んだことについてお話をいただいた。阿尾有朋准教授からは，目的や意義を意識するICT活用，宇大との共同歩調の重要性についてお話をいただいた。栗谷好子准教授からは，教務委員長の話や教育実習A協力校での巡回指導で学んだことなどをお話いただいた。津久井貴之講師からは，学校現場における教育環境の変化や，現場の先生方との意見交換で課題を把握できたことなどについてお話をいただいた。関口満教授からは，技術教育の果たす役割などを中心に，今後の抱負についてお話をいただいた。伊東陽講師からは，FD研修の場が，様々な分野の教員と意見交換をする場となったことなどをお話いただいた。阿部充寿准教授からは，実務家教員としての役割や，群馬県の教員をいかに育てていくかについてお話をいただいた。

どの新任教員も，赴任1年目から幅広い活動を活発に展開しており，今後ますますの発展が期待される。



### Ⅲ. 活動報告

#### 1. FD活動推進委員会の会議報告

##### (1) 第1回会議 2022年5月31日(火)

時間：11時50分～12時20分（第1回新任教員FD研修会終了後）

場所：共同教育学部 C108 教室

- 内容：1. はじめに
2. FD活動推進委員会に関する規定等
  3. 2022年度FD活動推進委員会の構成
  4. 2022年度FD活動推進委員会・会議計画
  5. 2022年度事業計画
  6. 2022年度報告書原稿の分担
  7. 第2回新任教員FD研修会の確認

##### (2) 第2回会議 2022年7月26日(火)

時間：17時30分～17時50分（第2回新任教員FD研修会終了後）

場所：共同教育学部 C106 教室

- 内容：1. 第3回新任教員FD研修会内容の確認

##### (3) 第3回会議 2022年12月5日(月)

時間：19時00分～19時10分（第3回新任教員FD研修会終了後）

場所：共同教育学部 C105 教室

- 内容：1. 今後のFD活動推進委員会事業計画
2. FD活動推進委員会報告書作成の確認
  3. 第4回新任教員FD研修会の確認

##### (4) 第4回会議 2023年2月20日(月)

時間：14時10分～14時30分（第4回新任教員FD研修会終了後）

場所：共同教育学部 C105 教室

- 内容：1. 2022年度事業計画等の反省
2. 2023年度事業計画等の検討
  3. 報告書の最終確認

##### (5) 第5回会議 2023年3月13日(月)～17日(金)(持ち回り)

- 内容：1. FD活動推進委員会報告書の点検・承認
2. 2023年度FD活動推進委員会事業計画(案)の点検



## 2. 新任教員の活動報告：「1年間のFD活動を振り返って」

家政教育講座 町田 大輔

### (1) はじめに

私は、2021年10月に家政教育講座に着任した。それまでは、栄養士や管理栄養士の養成大学・短期大学で働いていた。私自身も管理栄養士の養成大学の出身である。これまでに、教育学部で働いたこともなければ、学生として在籍したこともない。当然、小中学校の教員として働いた経験もない。つまり、教員養成に関しては全くの素人である。

そんな私にとって、この1年間のFD活動からの学びは大きかった。長年教員養成に携わっている先生方や、現場で小中学校などの教員を経験した先生方の話はとても参考になった。教育実習の現場を訪問し、学生の様子を見ることもできた。また、共同教育学部設置までの流れや現状の運用、今後の課題まで概要を把握することができた。

以下、1年間の活動を報告する。

### (2) 活動報告

#### ① 第一回新任教員研修会

第一回新任教員研修会の参加報告である。まず、2022年度FD活動推進委員の紹介および新任教員の紹介が行われた。推進委員の先生方や新任教員の先生方を把握することが出来た。次に、共同教育学部の歴史、組織、特色について、藤森学部長よりご説明いただいた。共同教育学部が出来た経緯や目的、現在の課題などを把握することが出来た。また、附属学校の役割として、附属中学校について関先生よりご説明いただいた。附属中学校での教育内容の一部をご紹介いただいた。今後、他の附属校についても説明をうかがいたいと感じた。最後に、FD研修会の概要や教員養成の仕組みについて安藤先生より説明があり、概要を把握することが出来た。教育実習については実習委員でもあるため、引き続き学んでいきたいと感じた。

#### ② 第二回新任教員研修会

第二回新任教員研修会の参加報告である。まず、附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説を伺った。附属中学校でICTを効果的に活用して授業を行っていることを把握することが出来た。公開研究会もオンラインで行っており、ICTを活用していることが分かった。次に、FD対象事業への参加報告が新任教員の先生方からなされた。附属小学校の公開研究会や大学教員による特別授業に参加した先生方の感想をうかがうことができた。対象事業は任意参加ではあるが、新任教員は参加したほうが良いことが分かった。最後の意見交換では、「集中力を切らさないためにはタブレットを使用する時間は10分」、「授業の構成がそもそもしっかりしていないとICTの活用は厳しい」、「特別支援では支援ツールとしての

ICT という側面が強い」などの様々な意見をうかがうことができた。

### ③ 第三回新任教員FD研修会

第三回新任教員研修会の参加報告である。まず、宇都宮大学との連携についての現状と課題を、教務委員長の佐野先生よりご説明いただいた。共同教育学部設置までの流れや現状、さらには今後改善していくべき課題について理解が深まった。新任教員からの質問一つ一つにご回答いただく時間も設けていただき、より深く理解することができた。次に、教育実習の振り返りについて、安藤先生よりお話しいただいた。実習先からの評価が良かった点、悪かった点について概説いただき、とても参考になった。来年度以降の教育実習にいかしていきたい。最後に、FD 対象事業への参加報告が新任教員の先生方からなされた。私の参加できなかった活動についても概要をうかがうことができ参考になった。また、同じ活動に参加しても各先生で違った視点があり、勉強になった。

### ④ 教育実習 A の授業見学

家政教育講座の学生の荒牧小学校での授業見学の報告である。家庭科の授業で、内容は手提げ袋の作成であった。前回の続きからで、見学した授業では手提げ袋にミシンで持ち手を縫い付けることを目標としていた。学生は、最初に全体に対して本時のめあてを示し、児童はそれを理解している様子であった。しかし、実際の手順の説明に関してはやや言葉足らずで、伝わっていない部分があるような印象を受けた。実際に作業が始まると、一部戸惑っている児童がいる様子が見られた。実習学生は、作業の途中にミシンの実演の時間なども設け、そこで理解した児童もいた。しかし、後ろのほうで見えなかったり、そもそもミシン作業の前段階でつまづいていたりする児童もいた。最終的に、全員が最低限のめあてを達成できている様子であった。しかし、事前の十分な説明や、個別のフォローができるとより良いと感じた。

### ⑤ その他

その他、教育実習 AB の研究授業・研究会参加を通して感じたことである。私は家政教育講座の食物学担当の教員として在籍している。家庭科教育について系統的に学んだことはない。したがって、研究授業で「食」以外をあつかう場合は、研究会に参加してもコメントに窮する場面がある。ましてや、小学校で国語や算数などの研究授業を行った場合など、研究会に参加しても、内容に関しては何の助言もできない。無力である。今後これらの場面に当たった場合の対応を考えていきたい。

### (3) 学問的知見と ICT 活用で変わる学び——附中特別授業(河内先生)からの学び

以上の活動を通して、この1年間で多くの学びを得た。今年度の学びをいかし、来年度以降の業務改善につなげていきたい。

### 3. 新任教員の活動報告:「FD 研修会及び教育実習からの学びと気づき」

特別支援教育講座 阿尾 有朋

#### (1) はじめに

私は令和3年10月に本学に着任した。前職は東京の私大で3年半にわたり保育士及び特別支援学校教諭の養成に従事していたが、それ以前は病院併設の障害福祉サービスの事業所で15年間勤務してきた。そのような経歴にあって、教育学部で本格的な養成に携わることには些かの迷いと不安があった。それは、教員養成の重責を担いながらそれに自分の経歴をどう活かしていけば良いのかということ、そして大学を修了してから既に20年が経過する自分の感覚が現代の学生や教育現場の感覚にマッチするのかという不安であった。その渦中であって、新任教員FD研修会はまさに‘渡りに船’であったと感じている。以下、新任教員FD研修会そして教育学部の中心的事業である教育実習に焦点化し、それらからの学びと気づきを整理しておく。

#### (2) 新任教員FD研修会からの学びと気づき

##### ① 第1回新任教員FD研修会(2022年5月31日)

- 学部長から共同教育学部の設立や趣旨、中期計画における位置付けについてお話を聴く。
- 入職以降、法人の中期目標や中期計画を意識することはなかったが、共同教育学部の強みや特色を活かした教員養成を行い、地域に貢献するために計画に沿った授業や養成の在り方について考える必要性を強く感じた。
- 附属学校・園での実習についての話は、本学における実習の全体像を把握し、「附属」であるからこそその強みや良さを感じることができた。

##### ② 第2回新任教員FD研修会(2022年7月26日)

- 附属中学校公開研究会に関する授業・研究について聴講する。
- ICTはただ導入すれば良いというものではなく、個別最適な学びと協働的な学びを実現するツールとして活用できることが理解できた。
- 一方で、授業者がICTをどう使うかその目的や意義が明確でないと、かえって学習の効果や効率化を阻害するリスクがあるのではないかと感じた。
- 文房具の一つとして生徒には選択の機会を担保している点が印象に残った。

##### ③ 第3回新任教員FD研修会(2022年12月5日)

- 教務委員長から「宇都宮大学との連携について-現状と課題-」というテーマでお話を聴く。
- 共同教育学部の制度的背景、本学と宇都宮大学における設置の経緯、現状の課題と展望について理解できた。
- 斉一科目の単位設定や授業の実施方法など課題は多いが、まずはカリキュラムの組

み立て、授業の進め方、委員会等における決議事項等について宇都宮大学と共同歩調をとることに努め、そのための場を設けるなどの仕組みづくりが必要であることを感じた。

### (3) 教育実習からの学びと気づき

#### ① 教育現場体験学習の巡回から

- 1年生の担任でもあり、学生の様子を知る上でも良い機会となった。
- 教育現場を知るといふ点では意義がある活動であるが、実習校で学生の態度について幾つか苦言を呈されることがあり、事前指導の工夫が必要であると感じた。
- 教育現場体験学習での様子から2年次以降の実習に向けて重点的な指導が必要な学生の抽出することもできるのではないかと思う。
- 参加する学生自身が観察なのか、授業に積極的に参加をすれば良いのか迷っている様子も見られた。事前指導で言われたようにだけ動くのではなく、実習校の教員に適宜確認しながら柔軟に行動することを学生に伝える必要もあるのではないかと感じた。

#### ② B 実習の巡回から

- 授業に係る学修の積み上げだけでなく、子どもとの向き合い方や言葉づかい等の態度にも1年生とは違う成長の跡を感じた。
- 特別支援学校の教諭を目指す学生にとって、基礎免許の実習として教科教育を学ぶ機会は重要であることを改めて感じた。
- 実習生からは「自分が理解しているつもりの内容を子どもにわかるように教えることの難しさに気づいた。」という声も聞かれた。
- 算数においてコンパスを使って長さを測る授業では、円を描く使い方が混在している児童が見られた。この経験から、実習生は自身が当たり前できると思っていることが、実は児童にとっては適切な理解に至っていないこともあり得ることに気づいたようだった。

#### ③ D 実習の巡回から

- 児童生徒の障害特性や実態を踏まえた上で授業に臨もうと努める姿勢がどの教生にもうかがわれ頼もしく感じた。
- 一方で、障害特性や実態が捉えきれず、教材や関わりの工夫、配慮が実態に沿っていないと感じられることもあった。
- 児童生徒の実態、障害特性を捉えるには時間を要する。係わり合いの中でこそ生きた実態が見えるからである。しかし、教育実習は時間の制約がある。その中で子ども実態を効率よく捉えることは、特別支援学校での教育実習全体に係る課題であると言える。
- 児童生徒の実態、障害特性をより深く理解し、授業を捉えるためには、事後指導とそ

の中での振り返り（リフレクション）が重要になると感じた。

#### (4) 今後の業務に向けた展望

##### ① 共同教育学部としての授業の在り方について

着任からの授業を振り返ってみて、斉一授業の一部（指導法関係の授業）で指導の難しさを感じている。特に私が担当している肢体不自由児の指導法に関する授業は、内容の特性上、実際の教具や支援具を扱ったり、身体に触れたりすることでしか伝えることが難しい内容が少なくない。そのため、これを遠隔のまま教授することに苦心するとともに、限界を感じた。今後、新カリキュラムへの移行ののち、斉一授業については改めて整理し、斉一授業の進め方についても本学と宇都宮大学とで教員が密に連絡をとり、調整を図っていくことが必要と考える。

斉一授業後のアンケートにおいて宇都宮大学の学生からは「群馬大学の教員の話も聞けて良い。」「群馬大学の学生の意見も聞けて刺激になる。」といったポジティブな意見がある一方で、「教員の手元が見づらい。」「群馬大学の学生の顔があまり見えない。」「共同で授業を受けている感じが無い。」といったネガティブな意見も少なくない。自身の担当する授業については、できる限りの範囲で学生の声に応え改善に努めていきたい。

##### ② 教育実習について

入学後まもない学生には未だ教員として働くという意識や目標が明確でなく、社会人あるいは組織人としての礼節や振る舞いにも明るくないと考えられる。このことを踏まえ、特に1年次の学生については事前指導の在り方について検討を重ねていく必要があると考える。

また、実習で得た学びや気づきを学修、そして教員としての円滑なスタートに繋げていくために、事後指導の充実が求められると考える。ただし、時間に制約があるため、学生自身が自ら振り返りをする力の涵養も重要と考える。今後、自身の授業を通してリフレクションについて学ぶ機会を意識して設けていきたい。

最後に、新任教員FD研修会は自らが学ぶ一歩に過ぎないと感じている。今回頂いた貴重な体験を基に「学び続ける教員」として教育、研究、運営業務に励んでいく所存である。

#### 4. 新任教員の活動報告:「FD研修会に参加して」

社会科教育講座 栗谷 好子

##### (1) はじめに

筆者は昨年度まで広島県の大学附属中・高等学校に四半世紀以上勤務した。大学での勤務は初めての経験であり、FD研修会を通じてさまざまな知見を得た。

##### (2) 研修会に参加して

###### ① 本学FD研修会

- ・5月31日 2022年度 第1回 新任教員FD研修会

藤森学部長より、第4期中期目標をもとに、群馬大学と宇都宮大学の共同教育学部設立の経緯、組織、特色、課題などをうかがった。

関附属中学校副校長より、附属中の教育活動、使命となる教育研究・教育実習、生徒の様子、働き方改革等を伺った。ご案内いただいた『教からできるICT活用ガイド』のwebサイトを3年生に活用させる。

安藤教員養成FD活動推進委員長より、新任FD研修会の事業計画の概要、教育実習の全体像等をうかがった。特に充実した教育実習の事前指導についてさらに詳しく伺いと思った次第である。

- ・12月5日 第3回新任研修FD研修会

佐野史教務委員長より、「宇都宮大学との連携についてー現状と課題ー」というテーマの講話を拝聴した。本学共同教育学部の成り立ちと、3年経過した現在の生じてきた課題について、簡潔にご説明いただき、よく理解できた。課題には、学生の卒業要件となる単位数の増加(夏休みがほとんどない状況)等があることを伺った。

###### ② 附属学校 公開研究会

- ・6月17日 附属小学校 令和4年度公開研究会

樋口晃教諭:5年3組, 社会, あたたかい土地のくらし~沖縄~, 全体研究

附属小学校の児童がICTを文房具のように使用して、調べたり、まとめたり、自分の考えを記入したり、グループの意見をまとめたりしている姿をみて、実習生となる学部生に子どもに使用させることができるようにしなければならないと感じた。

附属の先生方におかれては、授業開発のご苦勞をねぎらいたい。また、平日の午後にも関わらず、沢山の参加者に先生方の熱心な様子がうかがえた。

- ・10月14日 附属中学校 令和4年度公開研究会

後藤高行教諭:1年1組 社会科地理的分野 ヨーロッパ州

ICT を十分に活用した素晴らしい授業であった。「EU の5年後はどうあるべきか」という、大人が考えても答えが簡単には出ない問いを生徒に発問し、その問いを生徒は意欲的に追究していた。ロイロノートのアンケート機能、共有ノートを活用し、生徒の思考を深めていた。

### ③ 教育実習 授業参観

・9月26日 教育実習A 伊勢崎三中

社会科教育講座 3年 塩原楓さん 1年4組 社会科地理的分野 南インド

ICTを十分に活用し、生徒のインドに対するイメージを、授業を通して変容させる授業となっていた。

教科書の内容を全て扱うのではなくてインドの経済発展の中でもICT蚕業に絞り、なぜインドは急激に経済発展したのか、という問いを追究させる授業になっていた。

独自に資料を準備してモニターで生徒全員で共有し、ICTを活用して個人の活動からグループワークへと進み、「ひろば」に意見を提出させ、共通点・相違点をピックアップしていた。生徒への声かけ、机間巡視も充分になされていた。

授業規律が素晴らしく、生徒は全体を通して集中して授業を受けていた。

先生方のご指導により、学生の大きな成長を実感できる授業であった。

### ④ 授業観察

・11月18日 ピアレビュー週間 授業参観

関戸明子教授 小学校社会（二） 1・2時限

小学校社会の教育内容を確認させていただくために参観させていただいた。地理担当回であり、小学校第5学年の後半の「わたしたちの生活と環境」の範囲で、自然災害と森林についてであった。小学校の教科書内容と専門知識を結びつけて得られる工夫がなされていた。前回の課題の解説、学習指導要領上の位置づけ、自然災害を授業化する際の資料活用等について、さらに本時の課題1の個人作業、グループでの情報交換等の授業内容や、時間配分の方法も考えられ、進められていた。

宇都宮大学との斉一授業を初めて参観したが、今回は、宇大側が実践される授業を参観してみたい。

### (3) おわりに

1年ではまだまだ分からないことが多い。今後も機会あるごとにFD研修会に参加させていただき、新たな知見を得、先生方のご意見を伺いたい。

## 5. 新任教員の報告:「1年間を振り返って」

音楽教育講座 伊東 陽

### (1) はじめに

私は東京の私立音楽大学・大学院を修了後、ドイツの音楽大学へ5年間留学し、帰国後沖縄県立芸術大学等でピアノ、室内楽、歌曲伴奏法などの実技系の科目を指導してきた。希望者は中学校・高校の音楽の教員免許を取得することが出来るので、これまで指導した学生の中には教員になったものもいる。しかし、いわゆる教員養成大学における指導は群馬大学が初めてだったし、私自身が単科大学の出身であることから、着任前はいろいろと不安があったが、参加させていただいたFD活動を通し、教員養成課程の教員として今後の教育・研究を進めていくにあたり、多くの視点を得るきっかけをいただいた。

### (2) 活動報告

#### 2-1. 新任教員FD研修会の参加

私はこれまで、私自身の学生時代も、その後の教員生活においても、音楽分野に関係する人との関わりが多く、群馬大学で行われている教育活動や附属学校についての話や、さまざまな分野の先生方の教育に関するご意見を聞くことが出来たことは、大変学びが多かった。

第1回(5月31日)の研修会では、藤森学部長より共同教育学部の歴史、組織、特色について説明があった。全国初の共同教育学部設置に至った経緯や特徴、これからの課題などを知ることが出来た。

附属学校の役割として、附属中学校副校長先生から中学校における取り組みや現状の課題について説明があった。大学と幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校がさまざまな形で連携することによって、附属学校の生徒・子どもたち・教員、大学の学生・教員にもさまざまな相乗効果があることが理解することが出来た。

また教員養成の仕組みについては、1年生から教育現場体験学習を行うこと、3年生の教育実習がA・B合わせて8週間行われる点など、実践力を養うためのカリキュラムが充実していることが良く分かった。実践センターを中心に実習等のサポート体制が万全なことを知り、教員養成大学の強みを確認することが出来た。

第2回(7月26日)の研修会では、附属中学校公開研究会に関する授業・研究の解説についての説明があった。附属中学校で力を入れているICTの活用が、個別最適な学び・協働的な学びについて、実際に生徒たちのアンケートなどからも大きな効果があることを知ることが出来た。コロナ禍もあり、さらにICTは活用されているが、タブレット学習におけるメリット・デメリットについて研修に参加された先生方から多くの意見交換がなされ、新たな知見を得ることが出来た。「タブレットは文房具、使っても使わなくても良い」という言葉が印象に残った。今後学生と共に音楽科におけるICTの有効な活用方



法などをさらに考えていきたいと思った。

第3回（12月5日）の研修会では佐野教務委員長から宇都宮大学との連携について現状と課題についての講話があった。改めて共同教育学部になるまでの経緯や期待される効果，設置から3年目で見えてきた課題等を理解することが出来た。どの大学も少子化で入学定員が減り，それに伴い教員も減らされているが，そのなかで教育の質を保つために共同教育学部は大変意義のある取り組みであると感じた。しかし私も斉一科目を担当しているので，もっと共同教育学部の強みを見だし，生かしていく必要性を感じている。遠隔システムで授業を行うことのいろいろな問題の解決，生徒同士の交流だけでなく，教員同士の交流や意見を交換し，目指す教師像や理念を共有することが，共同教育学部をより良いものにしていくことになると思った。

## **2-2. 令和4年度 附属小学校・オンライン公開研究会に参加して 5年生音楽科「和音のうつくしさを味わおう」(6月17日)**

タブレットを活用した，音楽づくりの授業を見学した。あらかじめ決められたコード進行に合わせ，グループでアイデアを出し合っ，旋律やリズムを変えて自分たちの思いや意図を生かした音楽を作ることが目的であった。授業は運動会など身近なテーマを設定し，子どもたちにとって音や音楽が身近なものであることを意識させる工夫がなされていた。

タブレットを使って作曲することにより，子どもたちの中での楽器演奏の得意・不得意の意識や音を出すことの難しさから解放され，作曲活動に専念出来ている様子がかがえた。また決められたコードや自分たちの演奏を好きなタイミングで繰り返し聴くことが出来るため，活動の進行状況や出来をすぐに確認することが出来ていた。

ウェブ上での見学ではあったが，実際の教育現場でのICTの活用を見学でき，今後のICTを活用した授業づくりの参考になった。また子どもたちが全く問題なくタブレットの操作している様子を目の当たりにし，私自身もっと使いこなせるようにならないと改めて思った。

## **2-3. 令和4年度 附属中学校・公開研究会に参加して 3学年音楽科「歌舞伎に親しみ，その魅力を味わおう」(10月14日)**

タブレットを活用した，鑑賞の授業を見学した。勸進帳を通して，歌舞伎の歴史や西洋音楽との違いなどを理解した上で，重要な場面をピックアップし，その場面の話のあらすじ，登場人物の心情，聴きどころ，音楽や舞台の特徴などについて，生徒1人1人がプレゼンテーションをした。

タブレットはそれぞれが鑑賞するために使っていた他，プレゼンテーションをする際のスライドの提示，それぞれの意見をまとめるためにロイロノートへの書き込み等，さまざまな場面において活用されていた。

またタブレットだけではなく、ジグソー法を活用し、特定の場面について理解を深めるために話し合うためのエキスパートグループ、それぞれの場面の特徴をグループのメンバーにプレゼンテーションし、全体で1つのまとまりにするためのホームグループなど、アクティブラーニングの工夫もなされていた。

音楽の良さは本来言葉で表現しにくいものである。しかし自分の興味関心のあることを掘り下げ、自分なりの言葉でそれを伝え、仲間と共有することによって、音楽に対する理解が深まり、生徒たちが自分なりの音楽の鑑賞の力を向上させ、音楽との関わり方を見つけることが出来る授業であった。

この授業でも生徒たちのタブレットへの文字入力の手速、操作の手速に驚いた。従来の音楽科の授業の良さを残しつつ、ICTを活用した新しい鑑賞の仕方を今後検討していかなければならないと改めて思った。

#### 2-4. 教育実習A巡回指導

1年生音楽科「詞の内容と、曲想との関わりを感じ取ろう」附属中学校（9月15日）

1年生音楽科「いいおとみつけて」荒牧小学校（9月28日）

本学の音楽専攻学生が担当した、研究授業と授業研究会（研究会は荒牧小学校のみ）に参加した。私は音楽講座の実習委員なので、夏休みに実習事前指導で模擬授業を行った。その時よりも、授業の流れが良く、生徒・子どもたちへの説明もわかりやすく、声かけも自然で、実習での成長が感じられた。荒牧小学校で行われた研究会では、音楽専攻ではない本学の実習生も含め、活発な討議が行われ、学生達の真摯に学ぼうとする姿勢が感じられ頼もしかった。またFD活動には含まれないが、A実習において、研究授業を行わないゼミ生の学生の授業見学やB実習の研究授業も巡回に行ったが、どの学生も非常にまじめに取り組んでいる様子が見られた。各学校の先生方もお忙しい中、きめ細やかな指導をしてくださっており、感謝の気持ちでいっぱいになった。またB実習の巡回の際、どの学校にもおいても、必ず群馬大学の卒業生だと声をかけてくださる先生がいらして、本学の歴史や卒業生としての誇り、後輩たちへの愛情を感じる事が出来た。

### (3) 終わりに

1年間のFD研修を通して、群馬大学が附属学校や協力校と連携し、学生ファーストで将来の夢へ向かっての充実したサポートを行っていることがわかった。附属学校は教育研究機関として、ICTを活用しながら、先進的で質の高い教育を行っていることを知ることが出来た。また先述の通り、研修を通しさまざまな分野の先生方の教育や日頃の研究に関するご意見などを伺うことが出来たのも大変有意義であった。今後研修で学んだことを生かし、音楽の楽しさを、多くの子どもたちに伝えることが出来る教員を育成し、群馬県の教育の発展に貢献していきたい。

## 6. 新任教員の活動報告:「2022 年度群馬大学 FD 研修を振り返って」

保健体育講座 小山 啓太

### (1) 学内 FD 研修会

#### ① 新任教員 FD 研修会

日時：2022 年 5 月 31 日

第 1 回研修会に参加させていただき、群馬大学の長い歴史の中で共同教育学部に至る経緯や、組織の実情についてお話いただき、本学と宇都宮大学との連携の在り方、双方の特色を活かした教員養成の組織づくりについて理解することができた。私自身、前任の私立大学において 100 キロ以上離れたキャンパス間で遠隔授業を数年間経験してきて、学生の習熟度や満足度などをいかに高めていくかに苦勞し、大学キャンパスの違いによる学生の気質の違いに合わせた授業づくりなどを経験してきたため、本学でも機会があればその経験を生かして取り組みたい。

また、本学の教員養成の仕組みについては、附属学校園と密に連携した充実した現場での実習・実践教育について改めて理解することができた。

#### ② 附属中学校公開研究会の実践報告より

附属中学校での実践報告から、自ら問題を解決し未来を作る生徒の育成、一人一台タブレット端末の活用など積極的に実施している現状と、課題を知る機会となった。

学習指導要領では、個別最適な学びと協働的な学びの一体化が問われおり、附属中学校では、共生：心豊かに互いを生かす、創造：知性を高め未来を作ること等を念頭に、ICT の活用を進めている現場の具体的状況を詳しく知ることができたことで、教員養成大学における教育のあり方を考察する良い機会となった。

附属中の研究【ICT の活用による個別最適な学びと協働的な学びの一体化】(2 年計画)

- ・主体的・対話的深い学びの実現：「ICT は文房具として活用」
- ・課題の解決に向けて見通しを持ち、自らの考えを形成し、他者との協働を通して再形成したり自己の学びを振り返る

#### ③ ICT 活用について

附属中学校の生徒アンケート結果報告の中では、「効果的に見通しを立てて学べた」(17% 上昇)とあったが、その数値が単に生徒の ICT への慣れなのか、それともタブレットが実際に学習を効果的にしているのか、さらに環境を変えての研究が必要であると感じた。また、専門科目による ICT の活用方法については、各科目の特性などを十分に理解した上で、感性や創造性を育むより良い手法が何であるのかをクリティカルに問うことが求められるように感じた。

#### ④ 附属小学校公開研究会参加報告

授業公開研究会では、参加者からの報告の中で、「生徒が文房具代わりにタブレットを使っている」との発言があり、ICTが当たり前にある状態ができつつある現状の報告がなされた。ICTがある前提で授業準備やカリキュラム計画が作成され、教育の中になくってはならない状態になることを感じた一方で、「集中力が上がっていない」、「違うところに興味がいく」、「教科横断的な実施による改善策について検討が必要」などの意見もあり、委員らからは、ICTの使用は一時限に「10分」とすることの提案があり、ICTに頼り過ぎ、ICT使用ありきに陥り、本来の学びや体験が蔑ろにならない教員のマインドの重要性を感じた。

#### ⑤ 宇都宮大学との連携について

共同教育課程とは二以上の大学うち一つの大学が開設する授業を共同で履修することができ、設置形態の枠組みを超えて連携して将来設計を計ることを目的としており、群馬大学は全国にある6つの共同課程のうちの一つであり、2012年に獣医学部で始まり、2020年に本学が教育学部としては日本で初めて取り組んだ点で、これまでのご苦労や経緯を深く理解する機会となった。

また、教育需要が減ることへの施策として日本初の共同教育学部を設置した経緯があり、大学改革がかなりのペースで進む昨今において、宇都宮大学の小学校教科の手厚さという強みと、本学の中学校専門教科の強みの両大学の強みを生かした学部運営を目指しつつ、諸々の課題へ取り組むことの重要性も確認された。

国立大学改革方針では、今後、全国的に教員養成大学・学部の再編が進む可能性があることから、本学が先進的な取り組みとして担う役割の大きさも改めて認識する機会となった。

#### ⑥ 教育実習の振り返り

今年度の実習について、実習受け入れ校による事後アンケートの結果から、89%が「良好であった」「ほぼ良好であった」と回答を得ており、実習が一定の評価をうけていた。主な回答の中では、「誠実な態度で意欲的であった」、「謙虚な姿勢であった」、「真剣で前向きであった」、「率先して仕事を探していた」、といった意見が多かったということ、さらに、常に笑顔で対応、児童生徒の名前を覚えるなど、本学学生の実習への取り組み姿勢が良好であったことが伺える。

しかしながら、課題もあげられており、「挨拶、言葉遣い、連絡・相談、児童生徒への積極的な関わり」といった意見がいくつか散見され、社会人としてのマナーや礼儀についての指導、教職への希望の醸成など、日頃からの学生への指導の工夫へのヒントとなった。また、教員養成を担う教員として、授業研究会への参加、学習指導案作成指導、積極的な取り組みへの後押しといった要望へ少しでも答えられるように努めることが責務であると感じた。

## (2) 群馬大学共同教育学部附属中学校 公開研究会

日時：2022年10月13日

### ① 文部科学省 初等中等教育局 視学官 藤枝 秀樹氏 講話

テーマ：生徒の『主体的・対話的で深い学び』を実現する授業づくりを考える

急速な社会変化のなか、複雑で予測困難な時代において、子どもたちに変化を前向きに受け止め、人間らしい感性を育み働かせ、人生を豊かにするための初等中等教育について、「個別最適な学び」「共同的な学び」について講話がなされた。

主体的・対話的で深い学びとは、点数による評価ではなく、目的が達成されていることを重視し、子どもたちが主役として個を大切にしつつ協働することで、「教師が教えるスタイル」ではなく「子どもたちが学ぶスタイル」による教育を重要なポイントとしている。

ICTの活用についても、ICTを使うことが目的化していることや、ICTを積極的に活用する教師と使わない教師の二極化など憂慮する点があげられ、新しい時代に必要となる資質・能力の育成の3つの柱として、①「学びに向かう力・人間性」②「知識及び技能」③「思考力・判断力・表現力」が提言された。

### (3) まとめ

2022年度FD研修に参加させて頂き、群馬大学について、さらには群馬県内の義務教育の特色について深く学ぶ機会となった。さらに、さまざまな公開授業や研究会において、児童・生徒にどのような力を身につけさせたいのかや、授業の工夫や改善について、教員側も主体的に、子どもたちのためにどのような指導が良いのかを熟考することの重要性を感じ、めまぐるしく変化する世の中、多種多様でグローバルな世の中であるからこそ、教員養成学部の教員こそが、外の世界に大いに目を向け、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を柔軟に乗り越える資質や能力を高める努力を継続することが不可欠であると、改めて感じた。

## 7. 新任教員の活動報告:「附属学校園とのつながりから1年を振り返って」

技術教育講座 関口 満

### (1) はじめに

1年間、FD研修会に参加させていただき、参考にさせていただいたことや考えたことについて2つの場面で報告させていただきます。

### (2) FD研修会への参加報告

#### ① 7月26日のFD研修会から ～ICTの活用成果について～

ICT活用についての附属中学校からの提案、それを受けた協議を通し、下記の事項について参考にさせていただきました。

##### ○附属中学校のICT活用の成果について

- ・作業の簡略化や時短ができる
- ・複雑な考えをうまく整理できる
- ・色々なことを知り視野が広がる
- ・皆に知ってもらえる表現ができる
- ・自分なりに深めることができる

また、上記に加えて、「自分が気になるところを調べたり復習したりできるため、個別最適化に適した道具である」、「難しいことの克服では、皆で知恵を出し合うための道具である」という点も参考になりました。併せて、生徒へのアンケート結果「新たな課題を生み出しやすくなった 95%」から、ICT機器を生徒に深く活用させている様子がうかがえました。

##### ○協議を通して

- ・授業におけるICTや視聴覚資料の活用は、経験的に10分程度以内が効果的である。
- ・ICTについては、個別最適化といった学びに加えて、子どもたち同士による協働的な学びを進めるアイテムとしての位置づけを明確にしてきた。
- ・「目が疲れる、痛い」といったマイナス面も考慮しながら研究を進めたい。

#### ② 10月13日の附属中学校公開研究会から ～「統合」という考え方を生かす～

群馬大学共同教育学部附属中学校公開研究会における、公開された授業と関口が行った指導助言の内容(抜粋)を報告します。

##### ○授業の特徴

本時は、技術・家庭科、特に技術分野で新たに示された『統合』という考え方についての挑戦的な授業でした。統合の考え方は、日常生活から問題を見出し、これまでに学習してきた内容を組み合わせながら問題を解決していく学習です。学習指導要領で示されたものの各中学校では、指導時数や指導体制といった点から実施が難しい状況です。

本時は、生徒一人一人が見出した問題をグループで相談し、解決に向けて外部の方にオンラインで質問しながら解決策を練る場面でした。具体的には、グループでの問題を確認し合い、ノートや資料でこれまでの学習を振り返り、外部に方からの助言を丁寧に聞き取りなが

ら質問を返し、先輩の作品等を参考にしながらグループで熱心に話し合い、解決策を練り上げていました。話し合いが盛り上がりすぎて授業終了のチャイムが鳴っても、止まらない状況でした。

#### ○指導助言の内容（抜粋）

「統合」という考え方が生まれてきた背景には諸説ありますが、私は以下のように考えます。1980～90年にかけて、日本の家電メーカーは、世界の家電市場を席卷する勢いがありました。その時代、大型コンピュータの心臓部品である半導体D-RAMの生産は、世界の8割を日本で作っていました。日本には、豊かな発想とそれを実現していく技術、社会に夢や希望を与える力や勢いがありました。

それが今はどうでしょうか？ 私は、“日本よ、もう一度！”などという懐古主義は持っていません。持続可能で日本と世界の未来のために、私たちが「**今ある力で何ができるか**」、そして「**将来に向けて子どもたちの中にどのような力を育てたいのか**」について考えていきたいです。

「今ある力で何ができるか」とは、例えば、日本人の約半数が使っているiphonは、設計、試作、販売管理は合衆国のアップル社、組み立ては中国です。では、部品は誰がつくっているのでしょうか。iphon 1台におよそ1800個の部品が入っています。そのうち800個は、群馬県でつくっています。群馬県には、優れた部品をつくることのできる技術があります。今後、その技術を生かして設計や試作、組み立て、販売管理を統合して行えるようになることだと考えます。もちろん、持続可能で人々の生活を豊かにできる広義のマーケティングも含めて取り組むべきだと考えます。

「将来に向けて子どもたちにどのような力を育てたいのか」とは、身近に起きている問題に気づき、自分たちの力で解決していこうとする考え方や資質能力を育てることです。そのような資質能力がベースとなり、社会が求める仕事生まれ、産業が発展し、世界で雇用を生み出し、安定した生活を営める人を増やしていくことができます。

以上の2点の礎として教科の中で少ない時数となりますが、「統合」という考え方が生まれてきたと考えています。（後略）

### (3) おわりに

私は、以前、附属中学校に文部教官教諭として12年間、副校長として2年間勤務してきました。その間、研究開発校として、また、教育実習実施校としての使命や在り方について深く考え、その具現化に取り組んできました。その取り組みは、緊張感溢れるなかで現場体験をベースに多くの大学職員の方々にお世話になりながら体得し、組織化してきたものです。本年度からは立場が変わり、研究開発を支援したり、教育実習生を指導して本実習に送り出す役割となりました。この役割の変化について強く自覚させてくれたのがFD研修会の活動です。今後、FD研修会での学びを生かして、附属学校園の研究や教育実習に多少なりとも力添えができることを願っています。

## 8.新任教員の活動報告:「アメリカ人教師の経験」

英語教育講座 カステヤーノ ワキーン

### (1) 外部研修

#### ① 2022.3.22 英語教育 FD セミナーの開催

群馬大学へ奉職して最初の会議は英語教育 FD セミナーでした。この FD セミナーは、一般英語を教えるすべての教師をつなぐものでした。私は、入念に考えられたカリキュラム、特に本学で作られた教科書、Leap To The Future に非常に感銘を受けました。本学のいろいろな先生が制作に携わった教材を学生が使えるのは素晴らしいと思いました。2022年は1年生しか教えませんが、英語の1年生と2年生の両方のFDセッションに参加しました。大学の授業内容は教師が決めるため、群馬大学の一般英語プログラムの構成には感銘を受けました。また、大学が Moodle LMS システムを使用していることにも感銘を受けました。以前にこの LMS を使用した経験があり、学生の学習機会が広がりました。最後に、大学の他の英語教師の顔を見ることができましたが、誰もが親切で、助けてくださり、プロフェッショナルでした。

#### ② 2022.4.28 群馬大学共同教育学部附属小学校訪問 I



群馬大学共同教育学部附属小学校 6年生の英語のクラスに招待されました。Gavin 先生と高橋先生の指導力に感銘を受けました。先生方はとても協力的に教える体勢を作ってください、生徒たちは先生方に集中して授業を受けていました。また、カラフルな教室の教材、生徒の座席配置、テクノロジーのスムーズな使い方に感銘を受けました。生徒たちは英語を学ぶことに興奮しているようでした。生徒向けの短いビデオを作りました。それはアメリカにある私の故郷を紹介しました。ふるさとや宝物を紹介したり、学生たちに群馬のおすすめスポットを教えてもらいました。生徒たちがこのトピックについて自分たちのプレゼンテーションを作成することに興味を持っているのを見てうれしく思いました。



### ③ 2022.5.24 群馬大学共同教育学部附属小学校訪問 II

2 回目の授業参観では、私は生徒のプレゼンテーションの聴衆でした。3～4 人のグループに分かれて、群馬のおすすめスポットを紹介してくれました。おいしいレストラン、すてきな観光スポット、家族向けの楽しいアクティビティについて学ぶことができました。プレゼンテーションの後、生徒たちに英語で簡単な質問をしたところ、生徒たちがよく答えることができ驚きました。生徒たちは、タブレット PC を使って、写真や絵をたくさん使った魅力的なプレゼンテーションを作成しました。プレゼンテーション後に生徒たちが自分のパフォーマンスを振り返る様子にとっても感心しました。先生が授業の前に授業の目標を説明し、英語で例文を強調し、生徒に何度も練習させ、授業を振り返りの活動で終わらせる方法はとても良いと思います。

## (2) 学内 FD 研修会

### ① 2022.5.31 FD セミナー

初めての教員養成セミナーで、多くのことを学びました。まず、2022 年 4 月に群馬大学に同時期に入学した非常に優秀な教授陣について知りました。体育から音楽まで、様々な経験を積んだ専門家の方々に感銘を受けました。群馬大学の基本情報も学びました。宇都宮大学との連携教育体制に感銘を受けました。大学で数少ない外国人教師の一人として、このような有名な機関に参加する機会がめったにないと感じました。頑張ろうという気持ちになりました。

### ② 2022.7.26 FD セミナー

2 回目のゼミでは、群馬大学教育学部附属中学校について学びました。学校の校長先生のプレゼンテーションはとても印象に残りました。生徒たちの学校での生活が詳しく説明されていて、非常に感銘を受けました。スライドから多くの情報を学ぶことができ、写真はとても印象的でした。私は、学校が ICT を非常にうまく利用していることに気づきました。生徒たちは、さまざまな科目でタブレット・コンピューターを使用していると知りました。学校は積極的な学習と協力的な問題解決を重視しているようです。写真に写っている生徒たちの嬉しそうな顔が印象的でした。

### ③ 2022.9.3 FD セミナー

第 3 回教員養成セミナーでは、日本の学校における ICT に関するプレゼンテーションに感銘を受けました。群馬大学の先生方は学校でテクノロジーをうまく使っていると思います。英語の授業で ICT を使い続ける気力が湧いてきました。

## 9. 新任教員の活動報告:「1年間の取り組みを振り返って」

英語教育講座 津久井 貴之

### (1) 附属小学校公開研究会授業 5月25日(水)・31日(火)

「英語科」 6年1組 授業者:高橋 洋介先生・Smith Gavin John 先生  
“Wonderful City, Maebashi”～留学生に前橋のおすすめの場所を紹介しよう～  
「英語活動」 3年1組 授業者:原 雄規先生・Smith Gavin John 先生  
もっと自分のことを知ってもらおう! ～持ち物しょうかい!～

#### ・日本人教師の役割の明確化及び言語活動の設定や指導・支援のポイントの共有

アンケートや授業場面、授業記録、成果物等で児童・生徒の学習・活動実態を適切に把握することで、「思考力・判断力・表現力」を育成するための言語活動における「目的・場面・状況」の設定や目標・振り返りがより具体化される。これらの点について、英語科の先生方と共通の認識をもつことができた。

<参考資料 附属小学校英語科との共有資料の一部>

(研究会後に共有した授業メモ・研究会を踏まえた振り返り)

#### 【高橋先生自身のモデル提示】

- ・日本人の教師がモデルを示すことにより、ロールモデルとしての親近感や表現の意欲が違う、という研究結果を読んだことがあります。ALTの先生の発表は英語の表現や発音、全体としてどういう発表になるのか、といったモデルにはなっても生徒が目指せる、目指したいというモデルになるか、は別の話ということ。
- T:「どこの紹介だと思う?」→先生のモデル紹介 とてもいっつぶやき、声かけ。
- ・子どもたちに予想させてから聞かせるという自然なリスニングの流れを作りました。
- ・2度目のモデル提示前の Teacher-student Interaction (児童とのやり取り)、ギャビン先生にも振り返りながら、二度目のモデルではそれが入れ込まれたモデル提示になっていた。
- \*二度目はさらにどこに注意して聞くのか、よく聞いてみよう、に近い指示だったと思うが、どこが1回目と違うか聞いてみよう、でもよかったか。

高橋先生とは、言語活動のデザインや支援の工夫、さらに評価のポイントについて県内英語教員対象の小中連携をテーマにした研修会講師としてご一緒させていただいた。群馬県内の小中学校における指導上の課題や意識などについて改めて把握する機会を得ることができた。

### (2) 教育実習 A(伊勢崎市立第三中学校) 9月27日(火)

「英語科」 1年4組 授業者:藤沼 來世さん(英語専攻3年)  
Unit 4 Friends in New Zealand

#### ・学校現場の抱える指導場の課題の及び実習指導に関する要望等の把握

授業後の研究会で、英語科教員から3観点に基づく評価や妥当性と実現可能性を踏まえ

た評価の在り方について質問や相談があった。また、かつて教職大学院で学ばれた先生が指導教員として学生を指導されていた。この訪問をきっかけとして、教職大学院で学んだ成果を踏まえ、英語授業研究会の支部大会でご実践を発表していただき、授業を分析・解説する機会を得た。指導法を履修・聴講する本学共同教育学部の2・3年生5名も学会に参加し、小中高等学校及び大学の先生方に混じって勉強する機会を得ることができたのは、大学の指導法における学修と学校現場の実践、また、現職の先生方と学生のつながりという点で意義が大きかったと考えている。

### (3) 附属中学校公開研究会 10月14日(金)

「英語科」 3年3組 授業者：瀬戸 辰徳先生・Kay-Ann Barrett 先生  
The Story of Chocolate (PROGRAM 5 Sunshine English Course 3)

#### ・ICT活用の効果検証と教師の英語による生徒とのやり取りの質向上に関する共有・意見交換

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるためのICTの活用に関わり、協働的な学びを促すICTツールの活用によって一定の成果が見られた反面、個別最適化を促す指導や支援の工夫について、次年度の研究で充実させていくことについて意見交換を行った。また、英語によるフィードバックの重要性を再確認した。

<参考資料 附属中学校英語科との共有資料の一部>

(授業及び授業後の意見交換後に送付した資料より)

「エンゲージメント」：児童・生徒が学習する課題に対して主体的・能動的に夢中になっている状態 (Mercer & Dornyei, 2020) 教室内の活動への没入感を高めること

→この状態には3つのタイプがある。

- ① 認知的エンゲージメント (思考、方策、見通し) ← 認知的
- ② 感情的エンゲージメント (感動、楽しさ、自己内省) ← 感情的
- ③ 行動的エンゲージメント (没入、集中、参加) ← 行動的

→これを生み出す要素2つ

- ① 教師の介入・指導 (喚起、維持、強化：興味づけをして、能動的な参加状態を維持し、成長実感を与える、タイミングの良い発問、介入、指導、つぶやき、支援など) 今日のtry1と中間介入は何をねらいにしたか？
- ② クラスルール、学習規律・教室の雰囲気 (カルチャー)
  - 1) 子どもの成長マインドセット：(学習成果は自分の才能や性格ではなく、努力などのコントロール可能な要因によって得られていると感じ、努力次第でまだ伸びると信じられる心的傾向)があるか、育っているか。自分の成長は自分の努力でコントロールできる(ownership)をもてるか。
  - 2) 教師と学習者の信頼関係：教師が私たちと繋がっていると感じられるか。つまり、教師の心的態度 (学習観・信念・期待) が強く影響する。子どもの資質や能力を決めつけず、Trust、Empathy、Acceptanceの3つを意識した関わりをすることが大切。
  - 3) 学習集団の形成と教室文化の醸成：子ども一人ひとりが集団の中で必要なメンバーとして受けられているという感覚がもてるか。そのための受容的・協働的な対話や会話、ワークを生むルールやマナーの共通理解が必要。

→少し話は広いですが、「よいコミュニケーションはこうあるべき」という共通理解もここに入ってくると思います。

瀬戸先生には、公開研究会で授業公開する対象クラス以外の3クラスについても授業参観の許可をいただき、授業構想や指導案が日々改善されていくプロセスを目の当たりにすることができた。また、『英語教育』（大修館）にこの時の取り組みの様子を取り上げ、授業改善のプロセスを広く英語教育関係者に共有することができた。

#### (4) 附属小学校提案授業 11月17日(木)

「英語活動」 3年1組 授業者：原 雄規先生・Smith Gavin John 先生  
This is for you. ～がんばっているきみにありがとう～

#### ・外国語（英語）科における態度の育成と評価に関する課題認識と研究ニーズの把握

授業者に対し、附属小英語科が取り組んでいる内容に関わり、モチベーション研究の枠組みと学習指導要領における評価の観点「主体的に学習に取り組む態度」の関連について、理論的な背景や研究上の意義を確認することができた。

#### (5) 新任FD研修全体を振り返って

附属小中学校の役割や、共同教育学部の特色や直面する課題などに関するお話をお聞きする機会は大変貴重であった。附属中学校在任時や教育学部在学時とは大きく様変わりした部分もあり、附属学校園と連携した活動や自身の研究を進めるうえで大変参考になった。

中高等学校英語科の指導法開発や教員の指導力向上を研究の中心とする立場として、学校が抱える指導上の課題や英語科教員の実践の現状を把握することは今後も大切にしていきたい。また、本研修で得た知見や学校現場の先生方とのネットワークを生かし、英語教育の具体的な改善に資する研究を進めていきたい。

こうした機会をご提供いただいた委員会の先生方や講師としてお話いただいたみなさま、そして1年間新任研修をご一緒させていただいた先生方、大変ありがとうございました。引き続きよろしく願いいたします。

## 10 新任教員の活動報告:「1年間で振り返って」

教育実践センター 阿部 充寿

### (1)はじめに

私は、群馬県内の中学校で12年間勤務した後、指導主事として6年間学校現場に関わってきた。教員として働いているときは、目の前の生徒たちと向き合い、一人一人の資質・能力の向上に向けて、そして、指導主事としては、先生方の授業改善や各学校の教育課題解決に向けて、どのような支援ができるかを考えながら、業務に取り組んできた。

今年度、群馬大学と群馬県教育委員会との人事交流により、実務家教員として就任することになったが、当初は「群馬県の教育のために何をしていけばよいのか」、また、実務家教員として「どのように仕事を行っていけばよいか」など悩むことがあった。しかし、教育実践センターや授業実践開発コースの先生方の温かい声掛けや、運営委員の先生方に設定していただいたFD活動などを通して、少しずつ自分の取り組むべき方向が見えてきた。

以下、研修会や公開授業等に参加して学んだことや、今後取り組んでいきたいことについて報告したい。

### (2)研修に参加して

#### ア 第1回 新任教員FD研修会

FD活動推進委員が中心となり、研修の概要、本学部の特色、附属学校園に関すること、教育実習の内容等について説明がなされた。特に、藤森学部長より全国に先駆けて、宇都宮大学との共同教育学部設置に関する背景やその特色、そして、現在までの成果や課題等を直接うかがうことができ、たいへん有意義な時間であった。また、関副委員長からは、附属学校園の役割として、「群馬県のモデルとなる授業や研究の提案」「教育実習生の受入れ」「今後各市町村で活躍できる教員の育成」の3つを中心に、附属中学校の活動や学部との連携について詳しい説明があった。附属中学校とは、今後も教育実習や教育実践センターの業務等でもお世話になるため、情報交換を密にとりながら、更に連携を強化していきたいと感じた。

#### イ 附属小学校公開授業

附属小学校では、「社会に変革を起こす」を「正解のない未知な状況の中で、自分も他者も納得しながら、解決策を見いだして実践し、ともによりよく生きていくことのできる社会を創造する」ととらえ、「非認知的能力」を高める学びのデザインを通して、社会に変革を起こす子供の育成を目指している。

その中で、国語科では、「書くこと」の領域において、非認知的能力における忍耐力と社交性の育成を重視し、児童が書いたものを互いに読み合う中で、互いの考えを繰り返し聴き合い、粘り強く文章が書けるよう、「現実社会において書く目的の実現が約束されている学

習課題の設定」と「ICT機器による協働的に書くための学習環境の整備」について工夫をしているとのことであった。授業においても、児童たちは、保護者や下級生に向けて「どのように伝えたらよいか」といった点を意識し、JamboardなどのICTツールを活用しながら、友達同士で文章を推敲している姿が見られた。

また、英語科では、非認知的能力における目標への情熱を重視し、自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えるための手立てとして、「コミュニケーションを図る目的や場面、状況が現実の生活に近い課題の設定」や「自分の考えや気持ちを伝える英語表現を構想する発表構想シート」に関わる研究を行っている。授業においても、ALTや留学生に自分のことや地域のことを分かりやすく伝えるためには、「どのような内容にすればよいか」と思考している姿や、友達からの質問や教師のモデルを参考にしながら、タブレット上の発表構想シートに自分の思いや考えを追記している姿が多く見られた。

今後も群馬の英語教育について、義務教育課の英語の指導主事と連携を図りながら、附属小の児童の英語力を高められるように少しでも支援していきたいと感じた。

#### ウ 附属中学校公開授業

群馬大学共同教育学部附属中学校では、研究主題を「生徒一人一人の学びを最大限に生かす授業の創造」、副主題を「ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実に向けた実践を通して」として、研究を行っている。

参観した午前中の授業では、問題解決の過程において、それぞれの教科の特質に応じながら、ねらいを達成するための手立てとして、「ICTをどのように活用するか」がよく練られており、生徒が「個別最適な学び」や「協働的な学び」の際に、思考を深めている様子がうかがえた。特に、理科の授業で扱っていた「マイ探究シート」については、それぞれの単位の時間の課題以外に、単元を通して生徒一人一人が「探究したい」と感じたことをマイテーマとして取り組んでいるため、その活用次第では今後「学習の個性化」にもつながっていくと思われる。

また、学習指導要領改訂や令和の日本型学校教育の構築に伴い、「資質・能力」「個別最適な学び」「協働的な学び」「GIGAスクール構想」「観点別学習状況の評価」など、さまざまなキーワードが文科省より出されているが、午後の講演会の中で、藤枝視学官がそれらの関係性について分かりやすく説明していただいたので、自分の中で再整理することができた。

#### エ 河内昭浩先生（学部教員）による附属中での特別授業（国語）

本授業は、相手にある物事を説明するときに、具体的な事例を複数挙げて、共通する特徴を導き出す「一般化」について学習し、それを実際の文章の中で活用することをねらいとしていた。そのため、教師は思考ツールを含んだワークシートを用意し、体験したキーワードを見える化することで、生徒たちは各自の特徴をつかみ、



一般化しやすくしていた。また、ある群馬県の前期入試問題を提示しながら、「自分は〇〇という経験をしました。楽しかったです。」といった単調な文章ではなく、その経験から「何を学んだのか」や「何を考えたのか」を加えることで、より説得力が増す文章になることを伝えていた。

生徒は、タブレット上で前時までに書いた自分の文章と本時で改めて書いている文章を見比べ、論理展開や構成を再整理しながら、前時との変容を実感していた。特に、「コロナ禍、喜び」と一般化した生徒が、実際の文章の中で「マスクの下に広がる『笑顔』」と記述していたことが印象に残った。

#### オ 附属小・中学校教育実習巡回指導

附属小学校では、教育実習生への師範授業を参観した。どの授業でも ICT を有効に活用し、子供たちが密接することなく、考えを共有したり、比較したりして、学びを深めている様子が見られた。コロナ禍での授業づくりや、ICT の効果的な活用を目指す実習生たちにとっては、参考になる授業であったと感じた。



また、附属中学校では、教科ごとに実習生に部屋が設けられており、積極的に自分たちで教材の有効性を話し合ったり、模擬授業等を行ったりする姿が見られた。授業への指導だけでなく、実習生同士が学ぶ場を設定することにより、実習生の主体性を引き出している点にも感謝をした。

このような附属学校の先生方の細やかな指導のおかげで、教育実習が自信をもって授業に取り組む姿が見られた。今後も、学校現場で求められる力を育成できるよう、教育実習の事前指導の内容を充実させていきたいと感じた。

### (3)おわりに

4月から赴任し、「自分の役割ややるべきことは何なのか」を模索しながら1年間取り組んできた。「大学と教育委員会がどのような連携をしているのか」、「教育実習がどのように行われているのか」など、FD活動を通して、少しずつ見えてきた気がする。

これまで得た情報や知識を生かしながら、学部生や院生の学びへと還元できるよう、また、群馬県の教育のために、本大学と教育委員会とがより連携を図れるよう、少しでも貢献したいと考えている。

## IV. 編集後記

### 「FD を通して大学教員と附属学校園が連携することの意義」

副委員長 関 悟

30 年近く前になりますが、ある大学の先生から「学校経営過程を支え促す四つの権威」という話を聞きました。「四つの権威とは、『法 (law)・学識 (knowledge)・パーソナリティ (personality)・慣習 (custom)』で、これによって学校が動いているのだが、これらには強弱があり、一般的に『法』と『慣習』は強いが、『学識』と『パーソナリティ』は弱い」という話だったように記憶しています。

そのときに私が書いたメモには、「法」の権威は「学校活動の基礎となる権威であるが、この権威の行使に当たって予め任意裁量性が内包されている『合理的・外在的権威』である」と記されています。「学識」の権威については「経営過程のあらゆる要素に役割を果たし、高次の思考過程を媒介とする権威であり、この権威の妥当な行使によって組織目標の達成が確実になる『合理的・内在的権威』である」、また、「パーソナリティ」の権威については「学校組織体の構成員（とりわけ教職員）各自の性格的特質、価値・信念、欲求、興味、態度などから成る権威で、この権威によって社会単位としての学校が保持される『非合理的・内在的権威』である」、そして、「慣習」の権威については「学校を中心とする社会集団の伝統・習慣、道德規準などから成る権威で、特に教職の倫理に代表される職業文化が大きな影響力をもつ『非合理的・外在的権威』である」とそれぞれ記してありました。

ずいぶん昔の私のメモからの引用なので、現在の状況とは異なる部分があったり、私の書き間違いや思い間違いがあったりするかもしれませんが、どれだけの的を射ているか甚だ不安ではあります。それにもかかわらず今回このことを書かせていただいたのは、大学教員のみなさんと私たち附属学校園の教員では、意識の面において、この四つの権威それぞれへの重きの置き方に差があるように思えるからです。

たとえば、私たち附属学校園の教員は「パーソナリティ」や「慣習」を強く意識するが、それと比して「法」や「学識」はあまり意識していないように思います。翻って、大学教員のみなさんの中には「法」や「学識」への意識は強いが、「パーソナリティ」や「慣習」への意識をあまり強くもっていない方もいるように思えます。もちろん附属学校園の教員の中には「法」や「学識」をしっかりと意識して業務を行っている者もあり、大学教員のみなさんにおいても「パーソナリティ」や「慣習」への高い意識をもっている方が本学には少なからずいることも承知しています。

私たち附属学校園の教員も大学教員のみなさんにおいても、教育を様々な側面からバランスよくとらえ、共通の意識の下で教育について語り合うことによって、連携を深めることができると思います。申し上げるまでもなく、教育研究は「理論」と「実践」の両輪がかみ合っこそ、成果を上げることができます。私たち附属学校園の教員と大学教員のみなさん



とが同一步調で歩む基盤を強化することが、教育研究の更なる発展につながるものと考えます。そして、そのような基盤があつてこそ、FD は機能するものと考えます。今後も大学教員と附属学校園との教育をとらえる意識の面での接点をより多くしていくことで連携を深められるようなFD活動を推進していきたいと思ひます。

結びに、本年度の教員養成FD活動推進委員会の活動にご尽力いただいた安藤哲也委員長をはじめとする運営委員の皆様、事務担当の品川仁美さんに心より感謝申し上げます。

## 報告書の作成担当者

共同教育学部 教授（教育実践センター）	安藤 哲也（編集責任者）
附属中学校 副校長	関 悟
附属中学校 教頭	木村謙太郎
共同教育学部 教授（教育実践センター）	吉田 浩之
共同教育学部 講師（数学教育講座）	小泉 健輔
共同教育学部 講師（技術教育講座）	小熊 良一
共同教育学部 講師（家政教育講座）	佐藤 佐織
共同教育学部 講師（保健体育講座）	島 孟留
共同教育学部 講師（教育実践センター）	紺谷 正樹

群馬大学共同教育学部 学部・附属学校連携室

教員養成 FD 活動推進委員会 報告書

---

2023 年 3 月

発行 群馬大学共同教育学部 学部・附属学校連携室  
教員養成 FD 活動推進委員会  
群馬県前橋市荒牧町四丁目 2 番地  
電話（直通） 027-220-7385（事務局）  
F A X 027-220-7381（事務局）

---